

地域と学校の連携・協働の推進に向けた 参考事例集



文部科学省
生涯学習政策局
初等中等教育局

はじめに

平成27年12月、中央教育審議会において、「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について（答申）」がとりまとめられました。この答申では、今後の地域における学校との協働体制の在り方について、地域と学校が連携・協働して、地域全体で未来を担う子供たちの成長を支え、地域を創生する「地域学校協働活動」を推進すること、そのために従来の学校支援地域本部等の地域と学校の連携体制を基盤に、新たな体制として「地域学校協働本部」を全国に整備すること等が提言されています。

また、コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）の目的として、学校を応援し、地域の実情を踏まえた特色ある学校づくりを進めていく役割の明確化や、設置の努力義務化など、一層の推進を図るための、制度面・運用面の改善とあわせ、財政的支援を含めた条件整備等の方策を総合的に講じること等が提言されています。

さらに、文部科学省では、平成27年12月にまとめられた3答申（上記答申、「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について（答申）」及び「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）」）の内容を推進していくため、具体的な施策と工程表をまとめた『「次世代の学校・地域」創生プラン』を平成28年1月25日に策定いたしました。

文部科学省としては、答申を踏まえつつ、本プランを着実に実行していくため、地域と学校の連携・協働の推進に向けて、必要な制度改正や予算の充実を図るなど、具体的な取組を進めてまいります。

本事例集は、地域において、「地域学校協働活動」の推進、「地域学校協働本部」の整備、コミュニティ・スクールの促進といった、答申の提言内容に沿った活動に既に積極的に取り組んでいる事例を紹介しています。教育委員会や地域、学校関係者の皆様におかれましては、本事例集や平成27年度に文部科学大臣から表彰を受けた活動を紹介した『平成27年度の地域による学校支援活動事例集』の取組も参考にいただきつつ、それぞれの地域や学校の特色や実情に応じて、地域と学校の連携・協働の推進に取り組んでいただければ幸いです。

平成28年4月

文部科学省

生涯学習政策局社会教育課長 西井 知紀

初等中等教育局参事官 塩崎 正晴

目次

答申のポイント	1
◆ 「地域学校協働活動」とは	1
◆ 「地域学校協働本部」とは	2
◆ 「コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）」とは	4
◆ 地域学校協働本部とコミュニティ・スクールの一体的・効果的な推進	5
I. 地域学校協働本部とコミュニティ・スクールの一体的・効果的運営事例	
1. 地域における協働体制からコミュニティ・スクールに発展した事例	7
「ふるさと杉」を意識し、学校・地域・保護者が一体となった学校支援 東京都杉並区／杉並第一小学校支援地域本部	
2. コミュニティ・スクールから地域における協働体制に発展した事例	9
子供も大人も一緒に学ぶ 横浜市／市立東山田中学校区学校支援地域本部（やまたろう本部）	
3. コミュニティ・スクールと公民館型のネットワークを連携させた事例	11
地域総がかりで子供たちを育てる地域協育ネット 山口県長門市／深川中学校区深川地域協育ネット	
II. 地域学校協働活動に関する参考事例	
4. 地域コーディネーターの体制	13
「みんなの笑顔が輝く学校」をめざし、地域と共に子供たちを育成！ 東京都小平市／小平市立小平第四小学校学校経営協議会・学校支援地域本部	
5. 統括コーディネーターの配置事例	15
統括コーディネーターを配置し、コーディネーター同士のネットワークを推進 愛知県清須市／清須市学校・家庭・地域連携推進協議会	
6. 社会教育施設（公民館）との連携事例	17
社会教育施設（公民館）と連携した学校支援地域本部～通称:学校応援団～ 滋賀県蒲生郡竜王町／竜王町学校支援地域本部	
7. 最初の第一歩として取り組みやすい事例	19
学校・家庭・地域が手を取り合って、地域の宝である子供を育てる 愛媛県伊方町／三崎中学校区学校支援地域本部	
8. 地域住民の協力による学習支援の事例	21
地域住民と学校が協力した中学校夜間補充教室（がんばらナイト）を運営 東京都葛飾区／葛美中学校支援地域本部	
9. 放課後の安全・安心な居場所づくり	23
遊びも学びも友だちといっしょ！放課後のみんなの居場所 東京都品川区／第二延山小学校	
10. NPOとの連携・協働による取組	25
地域で子供を育てる ～夕見アフタースクール～ 東京都文京区/夕見アフタースクール運営委員会	

11. 家庭教育支援	27
親と子供に寄り添い、見守り続ける「ほっとルーム」の活動 滋賀県湖南市／湖南市立菩提寺小学校	
12. 学びによるまちづくり	29
学区ブランド産品「富より団子」がつなぐ学校と地域 奈良県奈良市／富雄中学校区学校支援地域本部	
13. 学びによる地域貢献	31
地域と学校が互いに支え合い高め合う、ボランティア活動 宮崎県都城市／山田中学校支援地域本部	
14. 社会福祉関係機関等との連携・協働	33
“かゆいところに手が届く活動”で、未来に続く人づくり 大阪府豊能郡豊能町／豊能町立吉川中学校区学校支援地域本部	
15. 地域人材の育成	35
「ふるさと科」を核として学校・家庭・地域が連携・協働する教育活動 岩手県大槌町／大槌町教育委員会	
16. 高等学校における地域との連携・協働の取組	37
エンリッチ・プロジェクト ～ 高校と地域の一体的な再生 ～ 岐阜県可児市／NPO縁塾、可児市議会、可児市諸団体、岐阜県立可児高等学校	

Ⅲ. コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）に関する参考事例

17. 「熟議」を取り入れた学校と地域の連携・協働の取組	39
小・中一貫教育による9年間の児童・生徒の健やかな成長と発達を目指して 東京都三鷹市／三鷹中央学園	
18. 首長部局等との熟議・協働・マネジメントによるCSの充実	41
地域総がかりで育む子供たちの自主性と思いやり 熊本県山鹿市／山鹿市立菊鹿中学校	
19. 学校支援本部・地域青少年育成会議との連携・協働	43
地域的課題解決と子供たちの教育環境の充実を目指して 新潟県上越市／上越市立春日小学校	
20. 学校運営協議会制度を活用した高等学校における地域との連携・協働の取組	45
まちを活性化する高校生の“ミッション” 高知県幡多郡黒潮町／高知県立大方高等学校	

■参考情報

地域と学校の連携・協働の推進に係る参考情報	47
-----------------------	----

昨今、地域の教育力の低下や家庭教育の充実の必要性が指摘されています。また、学校が抱える課題は複雑化・困難化しており、教職員のみならず社会総掛かりで対応することが求められています。このため、これからの厳しい時代を生き抜く力の育成、地域から信頼される学校づくり、社会的な教育基盤構築等の観点から、学校と地域がパートナーとして連携・協働するための組織的・継続的な仕組みが必要となってきました。

こうした背景を踏まえ、平成27年12月に中央教育審議会において取りまとめられた「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について（答申）」において、これからの地域と学校の目指すべき連携・協働の方向性として、以下の3点が示されています。

①地域とともにある学校への転換

開かれた学校から一歩踏み出し、地域の人々と目標やビジョンを共有し、地域と一体となって子供たちを育む「地域とともにある学校」に転換する。

②子供も大人も学び合い育ち合う教育体制の構築

地域の様々な機関や団体がネットワーク化を図りながら、学校、家庭及び地域が相互に協力し、地域全体で学びを展開していく「子供も大人も学び合い育ち合う教育体制」を一体的・総合的な体制として構築する。

③学校を核とした地域づくりの推進

学校を核とした協働の取組を通じて、地域の将来を担う人材を育成し、自立した地域社会の基盤の構築を図る「学校を核とした地域づくり」を推進する。

このような方向性に基づき、答申では、

- 地域と学校が連携・協働して、地域全体で未来を担う子供たちの成長を支え、地域を創生する「地域学校協働活動」を推進すること、この活動を推進するための新たな体制として「地域学校協働本部」を整備すること
 - 制度面・運営面の改善とあわせ、財政的支援を含めた総合的な推進方策により、コミュニティ・スクールを推進すること
- などが提言されています。

◆「地域学校協働活動」とは

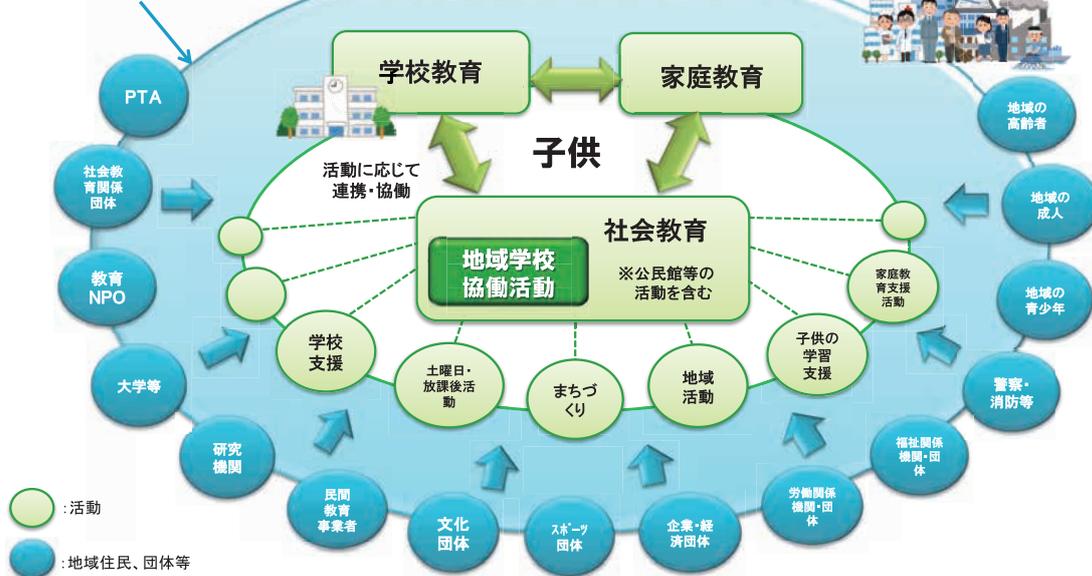
「地域学校協働活動」とは、地域と学校が連携・協働して、地域の高齢者、成人、学生、保護者、PTA、NPO、民間企業、団体・機関等、幅広い地域住民等の参画により、地域全体で未来を担う子供たちの成長を支え、地域を創生する活動です。具体的には、学校支援活動（登下校の見守り、花壇等の学校環境整備、授業補助等）、放課後子供教室、土曜日の教育活動、家庭教育支援活動、学びによるまちづくり、地域社会における地域活動等、幅広い地域住民等の参画によって行われる様々な活動が考えられますが、それぞれの地域や学校の実情や特色に応じて、創意工夫をこらしながら、多様な活動を推進していただくことが重要です。

地域全体で未来を担う子供たちの成長を支える仕組み（活動概念図）

◎ 次代を担う子供に対して、どのような資質を育むのかという目標を共有し、地域社会と学校が協働。

◎ 従来の地縁団体だけではない、新しいつながりによる地域の教育力の向上・充実、地域課題解決等に向けた連携・協働につながり、持続可能な地域社会の源となる。

★より多くの、より幅広い層の地域住民、団体等が参画し、目標を共有し、「緩やかなネットワーク」を形成



◆「地域学校協働本部」とは

「地域学校協働本部」とは、従来の学校支援地域本部等の地域と学校の連携体制を基盤として、より多くのより幅広い層の地域住民、団体等が参画し、緩やかなネットワークを形成することにより、地域学校協働活動を推進する体制です。地域学校協働本部の整備にあたっては、従来の学校支援地域本部等を基盤として、「支援」から「連携・協働」、「個別」の活動から「総合化・ネットワーク化」へと発展させていくことを前提とした上で、

- ①コーディネート機能
- ②多様な活動（より多くの地域住民等の参画による多様な地域学校協働活動の実施）
- ③継続的な活動（地域学校協働活動の継続的・安定的実施）

の3要素を必須としていただくことが重要です。

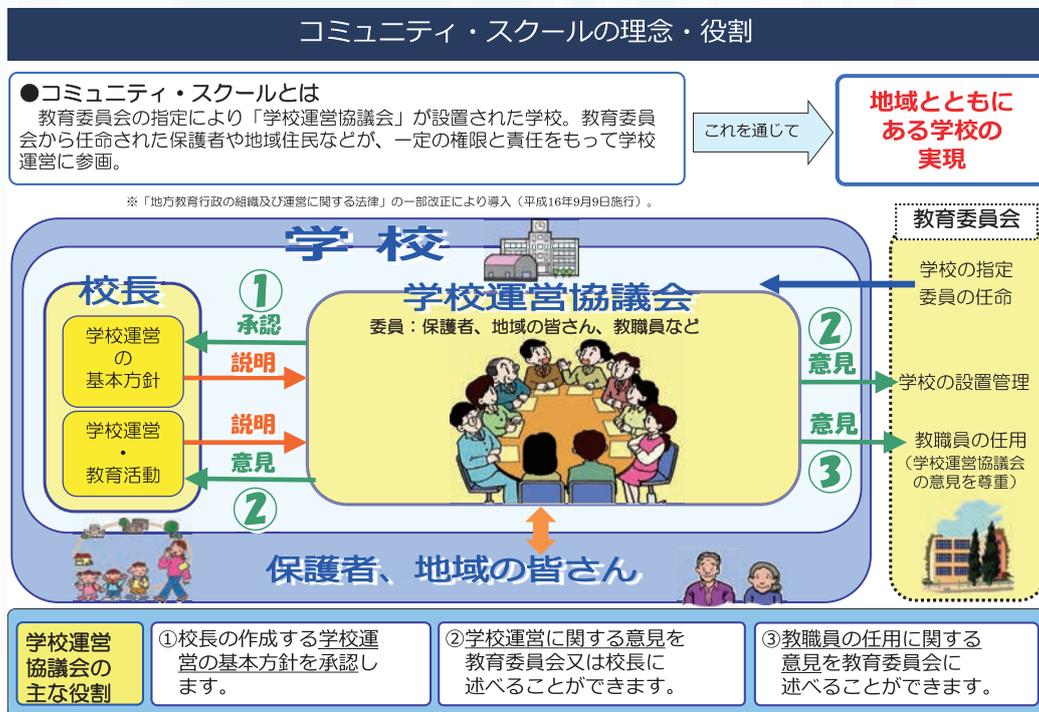
地域学校協働本部においては、学校支援活動、放課後子供教室、土曜日の教育活動、家庭教育支援活動、学びによるまちづくり、地域社会における地域活動等、様々な地域学校協働活動を推進していくこととなりますが、具体的にどのような内容の活動を行うかについては、地域や学校の実情や特色、同本部の発展段階に応じて、それぞれの地域において検討いただくこととなります。すなわち、地域学校協働本部においては、このような様々な活動の全てを最初から行うことを求めるのではなく、子供たちの成長にとって何が重要であるかについて地域と学校とでビジョンを共有した上で、可能な活動から着手し、徐々に活動内容の充実を図っていくことが重要となります。

学校支援地域本部等の基盤となる体制が既に構築されている地域においては、その体制を基盤として、コーディネート機能の強化、より多くの地域住民等の参画による多様な活動の実施、活動の継続的・安定的実施を目指して、地域学校協働本部へと発展させていくことが期待されます。また、これまでに学校支援地域本部等の活動が行われていない地域において

◆「コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）」とは

学校と地域がパートナーとして連携・協働するために、学校は「地域に開かれた学校」から一歩踏み出し、地域でどのような子供たちを育てるのか、何を実現していくのかという目標やビジョンを地域住民等と共有し、地域と一体となって子供たちを育む「地域とともにある学校」へと転換していく必要があります。地域学校協働本部がコミュニティ・スクールとともに活動を推進することにより、学校教育を含めた子供たちの教育の質を格段に向上させること等も期待できます。

コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）は、学校と地域住民や保護者等が力を合わせて学校の運営に取り組むことが可能となる「地域とともにある学校」に転換するための仕組みです。この制度を導入することにより、地域の声を学校運営に生かし、地域ならではの創意や工夫を生かした特色ある学校づくりを進めていくことができます。

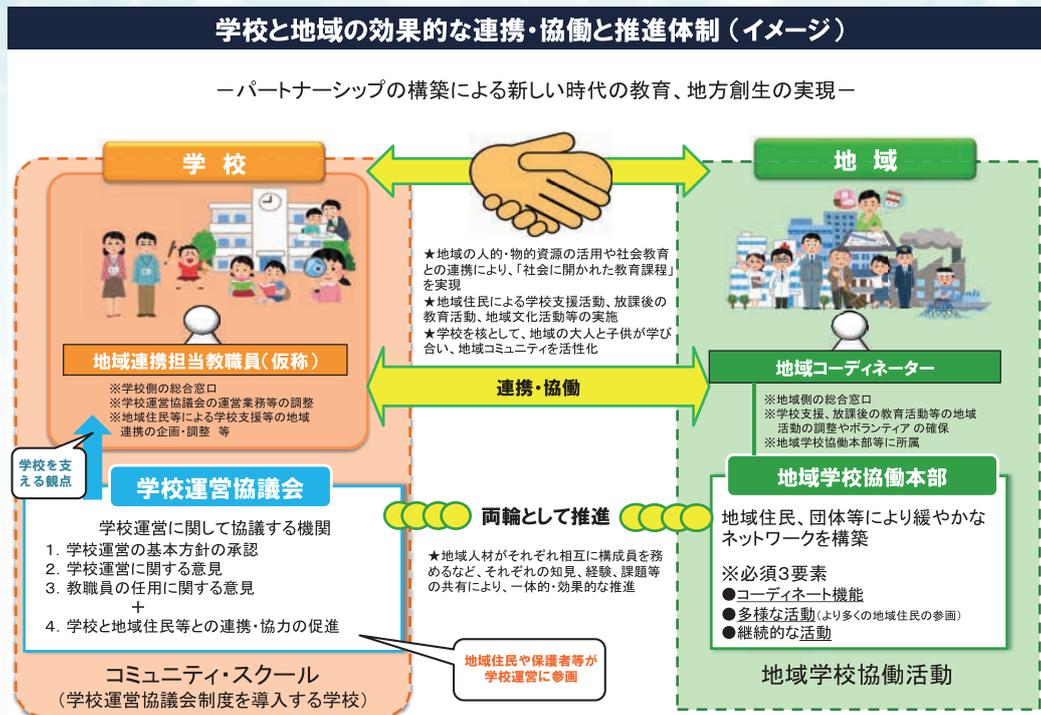


コミュニティ・スクールを導入することのメリットとして、以下の3つが挙げられます。

組織的・継続的な体制の構築＝持続可能性
○校長や特定の教職員の異動があっても、学校運営協議会によって地域との連携・協働体制がそのまま継続できる「持続可能な仕組みである」。
当事者意識・役割分担＝社会総掛かり
○具体的な権限を有していることから、地域が学校運営に対する当事者意識を分かち合い、ともに行動する体制を構築できる。
目標・ビジョンを共有した協働活動
○「校長が作成する学校運営の基本方針の承認」を通して、学校や子供たちが抱える課題に対して関係者がみな当事者意識を持ち、「役割分担をもって連携・協働による取組ができる」。

◆地域学校協働本部とコミュニティ・スクールの一体的・効果的な推進

答申の提言を実現していくには、それぞれの地域や学校における実情や特色を踏まえつつ、地域学校協働本部とコミュニティ・スクールが相互に補完し高め合う存在として、両輪となって相乗効果を発揮していくことが重要です。それぞれの地域や学校においては、本事例集で取り上げた事例も参考にしながら、地域学校協働本部とコミュニティ・スクールが両輪として一体的・効果的に機能を発揮していくことができるよう、それぞれの地域や学校における実情や特色に応じて、整備を進めていくことが期待されます。





事例



[地域における協働体制からコミュニティ・スクールに発展した事例]

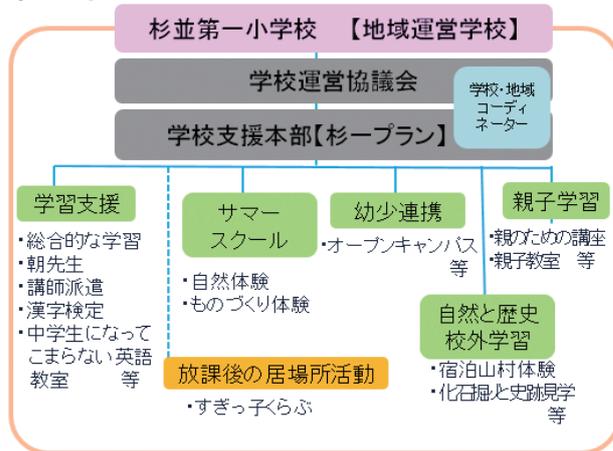
「ふるさと杉一」を意識し、学校・地域・保護者が一体となった学校支援

東京都杉並区／杉並第一小学校支援地域本部

■ 活動の目的・概要

- 杉並第一小学校を支援するために設置された、地域の人たちの学校応援団です。
- 地域から信頼される「力のある学校」づくりの支援を行っています。
- 「わが街阿佐谷、ふるさと杉一」を意識し、学校・地域・保護者が一体となって多様な学校支援活動や放課後支援活動を行う仕組みを構築しています。
- 杉一プラン独自の発想と協力体制による教育活動の更なる充実を図っています。

体制図



■ 活動の特徴・工夫

○「朝先生」

平成19年度から始まり、今年度で9年目を迎えます。毎週2日、授業開始前の職員朝会をしている時間に、各クラスに地域の方に入っただけ、百人一首や計算チャレンジの指導をしていただいています。朝学習には、年間延べ1000人以上の地域の方の協力を得ています。活動終了後、朝先生が日誌を作成し、その日の児童の様子を先生と共有できるよう工夫しています。また、朝先生が担任の知らない児童の一面を発見することもあり、先生の多面的な児童理解につながっています。



朝先生と百人一首

○「すぎっ子くらぶ」

自由遊びによる子供たちの成長を基本理念とし、放課後毎日実施しています。児童約200名が登録し、一日平均100名程度の児童が利用しています。卒業生やその保護者、地域の方がスタッフとなり、運営されています。「すぎっ子くらぶ」に来る日の授業中の様子なども把握できるよう、スタッフと先生とのコミュニケーションを密にとっています。



すぎっ子くらぶの様子

○「杉一共育くともいく>シンポジウム」

保護者・教師・地域が同じテーブルを囲み、夢を語り合う場をもちたいという願いから、学校運営協議会の主催により開催されました。同じ意識のもと地域が一丸となって学校を支える体制づくりを推進しています。

■ 立ち上げ当時

○平成14年度に、地域に開かれた特色ある学校づくりを推進するため、「学校教育コーディネーター」が区内に4名配置されました。その後、「学校教育コーディネーター」が、文部科学省が推進していた放課後子どもプランにいち早く取り組み、平成16年度に「すぎっ子くらぶ」を立ち上げました。また、学校と地域との連携をさらに発展させ、より組織的に学校支援を進めることを目的として、平成19年度に「学校支援本部」が設置されました。さらに、平成19年には学校運営協議会が設置されました。本校を担当していた「学校教育コーディネーター」が、設置当時から杉並第一小学校学校支援本部長として活動しています。

平成	
14	「学校・教育コーディネーター」配置 ※平成25年度から「学校・地域コーディネーター」へ名称変更
16	「すぎっ子くらぶ」立ち上げ
19	学校支援本部設置
20	地域運営学校に指定 (学校運営協議会設置)
27	

■ 展開・現在

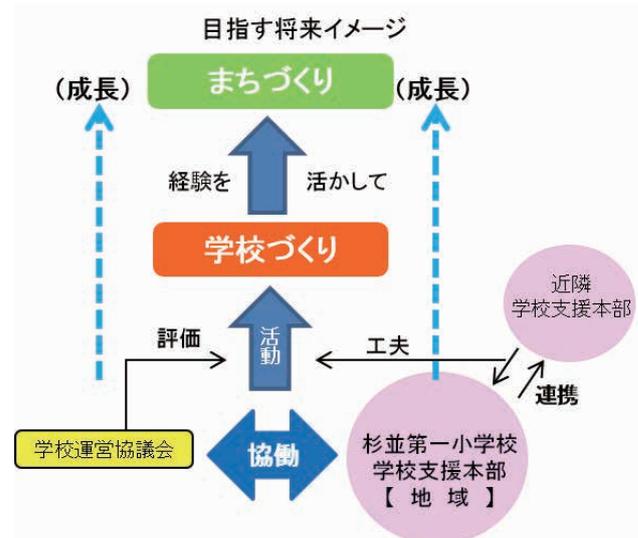
- 「朝先生」について、児童と教員にアンケートを実施し、その効果について調査しました。
児童の90%が「朝先生がいてよかった」と回答し、「色々なことを教えてくれる」「いてくれて安心する」といった、「朝先生」を心の支えとしている児童が多くいることがわかりました。
教員からは、「落ち着いた状態で始業できる」「多面的な児童理解ができる」といった意見が挙がりました。
また、「朝先生」の、子供の様子や変化に一喜一憂しながら成長を感じてくださる「地域の応援団」としての姿が見えてきました。
- 「すぎっ子くらぶ」は、平成16年度にスタートしてから12年目を迎え、「すぎっ子くらぶ」を卒業した児童の保護者がスタッフとして新たに加わり、より多くの地域の方に支えられながら運営されています。



朝先生のアンケート結果

■ 今後の展望・課題

- 地域と学校が連携・協働した学校づくりを進めるとともに、地域が学校支援によって得た経験を活かして、まちづくりを進めていきます。活動を通して、地域、学校双方の成長につなげていきます。
- 近隣の学校支援本部と人材、施設等を含めた多角的な視点から連携し個別の活動から「総合化・ネットワーク化」することで、取組の工夫や課題解決につなげていけるよう、情報共有や自主的な研修会の開催を進めます。
- 活動の充実と発展のための検証を行います。将来的には、学校運営協議会の評価を得て、常に課題を意識した取組を実践できるよう心がけていきます。



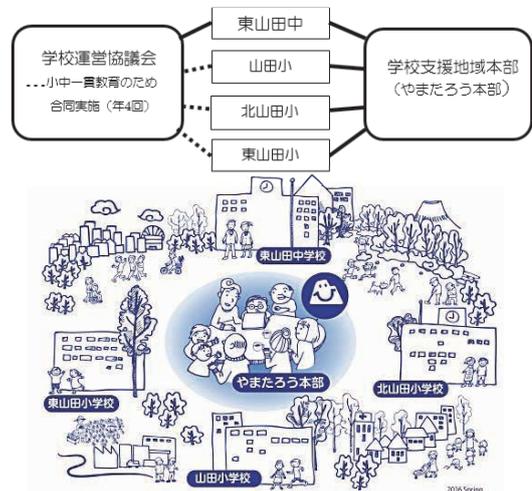
[コミュニティ・スクールから地域における協働体制に発展した事例]

子供も大人も一緒に学ぶ

横浜市／市立東山田中学校区学校支援地域本部（やまたろう本部）

■ 活動の目的・概要

- 平成17年、東山田中学校は神奈川県初のコミュニティスクールとして開校しました。学校運営協議会では、小中合同で審議・研修を年4回実施、中学校区としてのビジョン共有につとめています。
- 平成21年にスタートした学校支援地域本部は中学校区の4校（山田小、北山田小、東山田小、東山田中）の小中一貫教育を応援し、「地域とともにある学校」を推進するために活動しています。
- 小学校学習活動、中学校キャリア教育、土曜日等の活動をコーディネートしています。



■ 活動の特徴・工夫

- 中学校に地域の縁側のような「場」があります
中学校内に「生涯学習の場」「地域活動の場」「学校と地域をむすぶ場」として、コミュニティハウスが併設され、日常的に「人と情報」がつながるよう工夫しています。
- 「情報の共有」からスタート
平成18年度より、学校と地域の情報を掲載したコミュニティカレンダーを作成、情報共有するだけでなく、作成プロセスで中学校区の一体感が生まれ、連携協働が進みます。
- 「多彩な参画」をコーディネート
小3のまち探検やキャリア教育では、地域の企業、郷土資料館、福祉施設等とつなぎ、多様な学びの場を創出しています。
- 「大人の学び」を大切にしています
「学校支援ボランティア講座」や、地域と学校の合同研修など、学びの場を企画運営しています。
- 「継続性」を高めるための工夫をしています
 - ・人が代わると、それまで地域と学校が築いてきた信頼関係もくずれやすいので、「しくみ」として活動を継続できるよう、テキストを作成しました。
 - ・継続性を高めるための財源確保の試みとして「やまたろうファンド」を立ち上げました。
 - ・コミュニティハウスの棚を利用して、手作り品の常設バザーコーナー「やまたろうBOX」があり、収益の一部がファンドに寄附されます。



赤ちゃんから高齢者までが利用



ボランティアが作成するカレンダーとHP



教職員とコーディネーターの打ち合わせ

■ 立ち上げ当時

○平成17年春、学校運営協議会のあるコミュニティスクールとして中学校が新設されました。コミュニティハウスは「大人も子供もつどい学ぶ場、地域と学校をむすぶ場」として開館、当初はまず地域や学校とコミュニケーションを丁寧にし、信頼関係を築くことを第一にスタートしました。



中学校キャリア教育
1年生プロに学ぶ会

○学校ニーズから、初めてのコーディネーター「修了証書に名前を書いてくださるお習字の先生はいませんか？」という副校長の一言から学校支援活動がスタート。その後中学校キャリア教育、小学校特別支援の補助的な支援等、学校ニーズに応じて活動が広がっていきました。



小学校学習支援

■ 展開・現在

○土曜日活動の実施

理科とアートをテーマに地域の講師を招き開催。天体観測は夜間に実施することで特に父親の参加が多く、地域活動デビューのきっかけになっています。



土曜クラブ
学校ではできないダイナミックなアートに挑戦

○小中学校と地域ですすめる防災学習

PTAと協力して、3小学校の親子と中学生ボランティアが参加する「やまたらうBOSA I」を実施。幼稚園保育所等も加わり、地域とともに進める防災学習と連携しています。卒業生である高校生大学生が企画段階から加わり、当日消防団、地域企業も参加し、いざという時力を発揮する地域のネットワークづくりにつながりつつあります。



やまたらうBOSA I
企画段階から、中学生、高校生、大学生が参画します。

■ 今後の展望・課題

○繰り下りの計算や九九など基礎学力をつけるために、小学3年生までの学習支援「やまたらうクラブ」を始めました。今後は企業の協力を得てICTを活用したり、中学生も対象にしたいと検討を始めています。

○活動の継続性を保ち、地域との信頼関係を保ち、連携・協働していくために、複数のコーディネーターが常に活動できる体制づくりが必要。PTAOBやボランティア活動をしている人の中から、養成講座に参加する人をふやしていきたいと考えています。



[コミュニティ・スクールと公民館型のネットワークを連携させた事例]

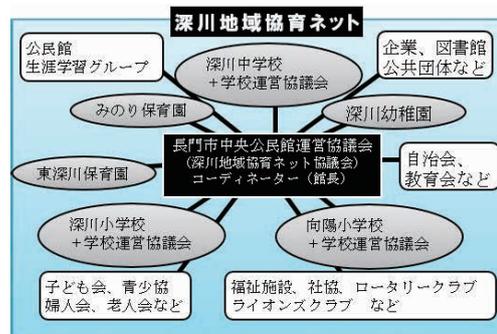
地域総がかりで子供たちを育てる地域協育ネット

山口県^{ながと}長門市／^{ふかわ}深川中学校区深川地域協育ネット

■ 活動の目的・概要

地域の多くの方が「つどい」「まなぶ」公民館には、生涯学習の拠点としてだけでなく、地域づくりの拠点としての役割が求められています。地域総がかりで子供を育てるときには、公民館に集う生涯学習グループや社会教育関係各種団体等は大きな力になります。

そこで、長門市では公民館の既存の組織を協議会として、公民館がコーディネーター役を担うかたちの「地域協育ネット」に取り組んでいます。



■ 活動の特徴・工夫

公民館型の「地域協育ネット」は、地域づくりの活動へとつながっているという意識の下に取り組んでいます。また、各学校の既存の学校支援ネットワークと公民館がもっているネットワークをつなげることにより、小・中学校における教育活動支援について、今まで以上に多様な活動を企画し、効果的な支援を行っています。

○学習支援

外部講師を学校の学習計画の中に位置づけ、子供たちが興味・関心をもち意欲的に学習に取り組めるように、教員は地域の方の参加による授業に積極的に取り組んでいます。授業に参加された地域の方々も、普段やっている学びが活かされたという満足感を感じられており、今後の活動の意欲づけにもつながっています。



音楽科 琴の指導



特別支援学級児童との活動



中学校で絵手紙指導



ラグビー指導

○わくわく土曜塾、わくわく子どもクラブ

公民館では、土曜日の子供の居場所づくりとして「わくわく土曜塾」を行っています。生涯学習グループや高校、各種団体と連携し、いろいろな体験活動を実施することができるのも公民館型の「地域協育ネット」のメリットです。



水辺の教室



水産高校生とかまぼこづくり



しめなわづくり



高校生との芋の苗植え

■ 立ち上げ当時

従来から、小・中学校ともに、学校支援ボランティアや外部講師による学習や地域の方々による見守り隊など、地域の「ひと・もの・こと」とかかわりをもち、「地域総がかりで子供を育てる」という活動が随所で行われていました。そこで、それぞれ独自に進められている既存の学校支援組織や団体をはじめとし、公民館で活動している社会教育関係団体や関係諸団体を網の目のように結び、「地域協育ネット」として進めていくことにしました。

また、各学校もコミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）を導入し、地域の意見を取り入れ、学校・家庭・地域が目標を共有し、連携・協働して子供たちを育てていこうとする体制を作りました。

■ 展開・現在

○取組の成果

公民館に集う生涯学習グループや各種団体が学校へ出向き、子供たちと活動することが日常的に行われるようになってきました。学校も地域の「ひと・もの・こと」とのかかわりを年間学習指導計画の中に位置づけ、子供たちが興味・関心をもち、意欲的に学習に取り組むようにしています。また、校内にコミュニティルームを新設することで、地域の方が学校で活動できるようになってきました。

○学校と公民館の連携した取組

公民館も積極的に学校運営協議会（コミュニティ・スクール）と関わり、連携した活動を行っています。

深川小学校では、地域・保護者の方々に気軽に学校に足を運んでいただくために、給食レシピによる昼食会を企画しています。

また、学校運営協議会では3つのプロジェクト（安全見守り支援、学習支援、学校環境整備支援）を立ち上げ、具体的な活動についての協議を行っています。そして実働に向けて、PTAやおやじの会、家庭教育学級との連携を図り、協働による取組を行っています。

深川中学校では、生徒自身が地域貢献という立場で公民館まつり・大掃除などの行事に積極的に関わり、地域の方々との交流を深めコミュニケーション能力を育てています。



おやじの会によるホワイトボードの取付作業



公民館まつり準備作業

■ 今後の展望・課題

○課題

「地域総がかりで子供を育てる」という意識は、実践や広報活動等により地域の理解が進み、協力を得られるようになってきましたが、「子供と関わると疲れる」「高齢でなかなか出られない」などの声もあり、今後、更に若者や地域の方を巻き込む方策を考えていきたいと思っています。

○今後の取組

公民館に集う生涯学習グループや各種団体が学校へ出向き、子供たちと活動することが日常的となってきました。本地区の「地域協育ネット」は、地域づくりの一環として取り組んでいます。今後も、「地域総がかりで子供を育てる」という意識の下に、既存の活動を中心に実践を積み重ねていこうと思っています。また、子供たちと地域の方のニーズや思いを吸い上げ、新たな活動にも取り組んでいきたいと考えています。そのためにも、各活動をしっかりと評価しながらプランを立て、アクションを起こしていきたいと思っています。さらに、小・中学校で連携を図りながら、子供たちが地域貢献する活動へと発展させていきたいと考えています。

[地域コーディネーターの体制]

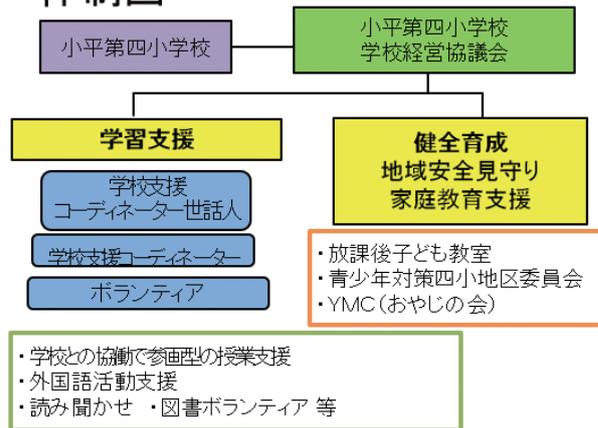
「みんなの笑顔が輝く学校」をめざし、地域と共に子供たちを育成！

東京都小平市／小平市立小平第四小学校学校経営協議会・学校支援地域本部

■ 活動の目的・概要

- 学校経営協議会（学校運営協議会）では、学校経営方針に関する協議を行うだけでなく、「学習支援」「健全育成」のプロジェクトチームとしての協議を行います。
- 学校支援コーディネーター世話人（市の委嘱、各校2名以内。以下世話人）は、学校との協働の中で学習支援（外国語活動、地域参画型授業の計画、講師や人材の発掘確保など）を行います。
- 学校支援コーディネーター（学校長が各校判断で依頼。以下コーディネーター）は、世話人等からの依頼に基づき、ボランティアへの説明や依頼を行います。

体制図



■ 活動の特徴・工夫

- 学校と地域との協働でスムーズに授業等が実施できるよう、世話人はボランティア等と面談を行い、趣旨等の理解を図ったうえで授業支援や学校支援に参加してもらっています。
- 学校経営協議会のプロジェクトの1つとしてスタートした「地域見守り」プロジェクトでは、学区域の6つの商店街と2つの自治会と連携し、地域全体で子供たちを見守る活動を展開しています。コーディネーターは、商店会への依頼をする等、調整しています。
- 教員が大学での研修を受講したことをきっかけとして、地域の教育力による外国語活動を推進するために、近隣の大学等と連携して「話せる英語」を目指して、質の高い授業を実践しています。
- 学校の広報を重視し、世話人・コーディネーターと教員と一緒に内容を考えたホームページや学校経営協議会の議事録などの公開、「四小だより」を自治会を通して配布するなど積極的に広報しています。
- 玉川上水が学校のすぐ南側にあるので1年生から6年生まで自然、歴史、環境などを学年に応じて学習します。そのための地域人材と学校、世話人・コーディネーターの話し合いにより、豊かな授業を展開していきます。
- 地域のお年寄りとの交流の場として「にじいろひろば（※）」を開催し、昔あそびなどの授業支援のコーディネートを行います。
- 学校が立てた授業計画に基づき、授業支援に関わるボランティアの役割を話し合う等、学校、地域をつなぐのが世話人、コーディネーターの重要な役割です。



玉川上水の歴史の授業風景



1年生 昔あそび名人に

※にじいろひろば
世話人が企画・運営し、毎月第1・3木曜日の中休み（20分休み）に、地域の高齢者が学校の教室などで子供たちと昔遊びなどを行います。

■ 立ち上げ当時

- 学校と地域のかかわりは青少年対策活動や商店会のお仕事体験等を通してとてもよい関係にありました。
- 開かれた学校を目指し、学校支援ボランティアの大募集を行ったのが平成15年です。
- その頃にあった学校支援で現在も引き続き活動しているのが「図書ボランティア」、「読み聞かせ」、「安全見守り」、「花いっぱい」、「にじいろひろば」等です。
- それぞれの活動はPTAや放課後子ども教室などの中で根付いていました。
- コミュニティ・スクールとして四小が歩み始めた時をきっかけに、学校経営協議会を中心に学校支援地域本部のイメージが出来上がりました。
- 学習支援体制を整えるため、学校支援コーディネーター世話人は、学校長が推薦し、市が委嘱することとし、学校支援コーディネーターは学校長がそれぞれの活動の中心にいる人に依頼することとなりました。



お仕事体験



にじいろひろば

■ 展開・現在

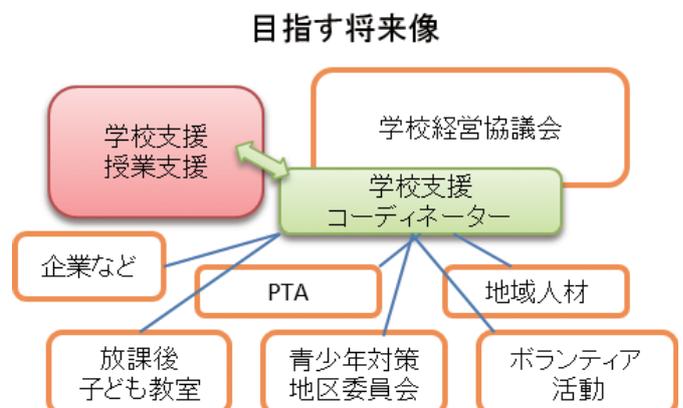
- それまでのボランティア活動をまとめ、新たに学習支援を立ち上げました。学校が目指す授業に地域の力を生かし、学校と学習のねらいや趣旨を共有するため、全教職員と学校経営協議会委員による熟議を行い、より豊かな授業支援が行えるようにしています。
- 子供たちは知り合いの地域の人たちが増えたことで、かかわりが増え、体験を通して表現力が増したと思っています。また、安全面でも成果がみえます。



学校経営協議会の中で全教職員と委員との「熟議」の様子
*学習支援と健全育成などについて

■ 今後の展望・課題

- 学校は子供たちの学習の場であるとともに、よい大人になるためのたくさんのかかわりの場でもあると思います。
より多くの地域の方たちとのかかわりの中で、豊かな心をもって、自分の思いを確かな言葉で伝え合うことができる人になってもらいたいです。
- 四小がめざしている
「みんなの笑顔が輝く学校」
～子どもも、保護者も、教職員も、地域も～
の実現をめざしいろいろなツールを活用し、連携・協働を進めていきたいと思っています。



[統括コーディネーターの配置事例]

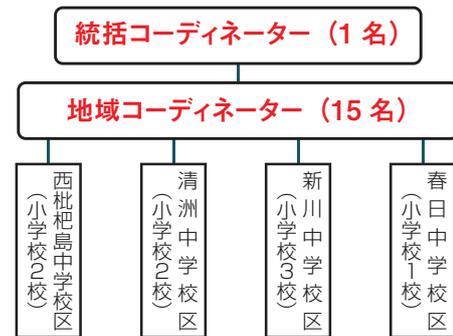
統括コーディネーターを配置し、コーディネーター同士のネットワークを推進

愛知県清須市 / 清須市学校・家庭・地域連携推進協議会

■ 活動の目的・概要

- 学校支援地域本部事業が、充実するためには、地域コーディネーターが重要です。
- 新たに地域コーディネーターが誕生し、経験を重ねていく過程において、地域コーディネーターをバックアップするために、統括コーディネーターを配置しました。統括コーディネーターは、次のような役割を担っています。
 - ・ 地域コーディネーターのネットワークづくりの支援
 - ・ 地域コーディネーターの負担軽減
 - ・ 学校支援地域本部の効率的な活動体制の構築支援

体制図



(平成 28 年度)

■ 活動の特徴・工夫

- 児童委員として活動していた人材が、^{にしびわしま}西枇杷島中学校区での学校支援地域本部の地域コーディネーターとして経験を積み、学校支援活動を清須市全体の取組に発展させていく段階で、統括コーディネーターとして活動することになり、現在に至っています。
- 統括コーディネーターは、放課後子供教室や、児童館、幼稚園、保育園等と交流し、学校とのパイプ役を果たしながら、市内全体の学校支援地域本部事業の活動を広げていくための方策を立てています。
- 統括コーディネーターは、地域の老人クラブ(寿会) や、子供会、社会福祉協議会等の市内のボランティア団体と交流し、学校支援地域本部事業を理解してもらい、学校支援ボランティアとしての協力をお願いしています。
- 統括コーディネーターは、それぞれの学校区の地域コーディネーターとともに、地域を担う次世代育成のため、中学生が地域の清掃活動や防災訓練等に気軽に、そして積極的にボランティアとして参加できるように、地域や学校に働きかけ、中学生のボランティア参加への体制づくりをサポートしています。
- また、西枇杷島中学校区では、学校を核とした地域づくりを進めるため、子供達の安心・安全な生活について考えるセーフコミュニティ連絡協議会を立ち上げました。様々な関係機関に参加を呼びかけ、地域ぐるみで学校を支える新たなつながりを築いています。



寿会の方々による生活科の学習支援「野菜の先生」



幼稚園の運動会時における中学生ボランティア活動支援

『にしびセーフコミュニティ(NSC)連絡協議会メンバー』

- 中学校校長・教頭・教務主任・校務主任
- PTA役員 ○学校評議員 ○生徒会役員
- 地域コーディネーター ○民生主任児童委員
- 人権擁護委員 ○保護司 ○更生保護女性会

■ 立ち上げ当時

都市化により、地域のつながりの希薄化が懸念される中、西枇杷島中学校区では、平成20年に、新たな絆づくりを模索するため、学校関係者・地域の有識者等14名による協議会を立ち上げました。協議会において、10年20年後にも続いていくような、無理のない持続可能な活動の推進を図ることを決めました。

2年目に、協議会で地域コーディネーターの必要性について話し合い、協議会メンバーの中から、2名（PTA会長、主任児童委員）を地域コーディネーターに選出しました。3年目は、地域コーディネーターの企画により、「読書ボランティア養成講座」を開催し、のべ81名が参加しました。

『にしび地域教育協議会メンバー』

- 校区内小中学校校長・PTA会長
- 校区内小学校教頭
- 民生委員連絡協議会会長
- 西枇杷島商工会会長（社会教育委員）
- にしび山車保存会会長
- NPO法人下小田井防犯協会（寿会会長）
- 人権擁護委員
- 主任児童委員

『スローガン』

いつでも・どこでも・だれでも
⇒
できる人が、できることを、たのしく

■ 展開・現在

○4年目から、統括コーディネーターが、市内の学校支援地域本部の未実施中学校区において、地域コーディネーターの発掘や育成、事業展開の支援を行い、市全体の取り組みへと広げました。

○清須市では、読書活動推進の支援に取り組んでおり、平成23年に開館した清須市立図書館と協働し、定期的に読書ボランティア養成講座を開催しています。30歳代から70歳代の幅広い年齢層の読書ボランティアの方々が、読み聞かせや図書修繕等、各学校で活躍しています。

○また、小中学生を対象とした読書ボランティア養成講座も開催し、春休みや夏休みには、児童館や図書館でおはなし会を開催しています。

○今春高校を卒業した子や大学生になった卒業生が、小学校の朝の読み聞かせに来てくれるようになりました。放課後子供教室のイベントに参加したり、小学生対象の講座にアシスタントとして参加してくれる中学生ボランティアも育っています。



自作のペープサートを上演する卒業生

『学校支援ボランティア』登録人数

1年目	130名
2年目	563名
3年目	1,180名
7年目	1,830名

■ 今後の展望・課題

○ボランティア同士の交流を図るため、市内全12校の読書ボランティアに声をかけ、平成28年度には、ボランティア同士のネットワーク会議を開催する予定です。

○また、防災教育の一環として、学校の防災訓練に地域の方々が参加していましたが、今後は、地域の防災訓練に、中学生にもボランティアとして参加してもらう予定です。平成27年度、2地区において先行して行い、今後は、地域と学校が連携・協働し、さらに拡大していく予定です。大人と子供が、互いに交流し、学ぶ場として発展していきます。



地域の防災訓練に参加する中学生の様子

連絡先：愛知県清須市教育委員会生涯学習課 052-409-6471 shogaigakushu@city.kiyosu.lg.jp

[社会教育施設（公民館）との連携事例]

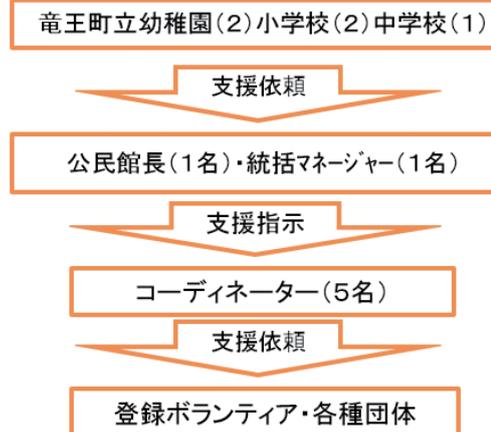
社会教育施設（公民館）と連携した学校支援地域本部～通称：学校応援団～

滋賀県蒲生郡 竜王町がもうぐんりゅうおうちょう／竜王町学校支援地域本部

■ 活動の目的・概要

- ひとつづくりまちづくりの拠点である公民館（町内に1館）の中に、学校支援地域本部を設置し、公民館長、統括マネージャー1名及びコーディネーター5名体制で、各学校単位でなく、町全域（町内5校園）の学習支援をコーディネートしています。
- 支援の対象を町全域としたことで、支援分野が広範囲におよぶことから、地域ボランティアの人材確保にスケールメリットが生きることになります。

体制図



■ 活動の特徴・工夫

- 円滑な学校応援団（学校支援地域本部）活動を図るため、平成23年度に、町内全域の地域ボランティアと学校・園をつなぐパイプ役として、統括マネージャーを配置しました。
- 統括マネージャーとコーディネーターが、月に1～2回、学校・園からの依頼や要望の検討をしたり、意見交換等を行う場として、学校応援団定例会を設けています。
- 統括マネージャーとコーディネーターが支援時の様子を見学し、地域ボランティアからの意見を聞くようにしています。
- 社会教育主事の資格を持った公民館長がパイプ役となり、地域の多様な経験や技能を持つ人材や公民館利用団体等と連携した学習支援を実施しています。公民館で学校支援にもつながる分野の講座を開催し、地域ボランティアの人材確保と人材育成を図っています。平成27年度は、『水墨画』の自主活動グループが、竜王中学校1年生の美術の授業で水墨画の指導補助を行いました。
- 地域から学校への支援にとどまらず、地域ボランティアの方々を幼稚園や小学校の感謝祭（子供たちが田植えや稲刈りを行い収穫したお米を使ったイベント）や収穫祭（ボランティアの指導により子供たちが育てた大根を使ったイベント）に招待するなど、「学校から地域への交流活動」を行っています。



学校応援団定例会の様子



水墨画グループによる学習支援
（竜王中学校1年生・美術）

■ 立ち上げ当時

○竜王町では、平成22年10月から文部科学省の支援を受け「竜王町学校支援地域本部事業」を立ち上げました。これまでも学校では、ゲストティーチャーとして地域の方々の協力を得ながら学校支援を進めてきましたが、この事業では、「統括マネージャー」と「コーディネーター」を配置することで、多様な経験、知識、特技などを持った地域の方々と学校・園が支援して欲しいことを結びつけることができ、今まで以上に、地域の方々が学校・園で活躍できるようになりました。初年度には、竜王小学校で、図書ボランティアの会議を、生涯学習課課長、校長、コーディネーター、地域ボランティアで行いました。



竜王小学校・図書ボランティア会議

■ 展開・現在

○立ち上げ当初は、週に一度、統括マネージャーが小学校職員室に駐在をして、どのような支援ができるか等の打ち合わせをしていましたが、現在は学校・園からFAXや電話で支援の依頼があり、必要に応じて打ち合わせを行っています。

○近年は、小・中学校の家庭科の授業支援や、小学校・幼稚園での講演会や参観日等の託児支援の依頼が多く、地域ボランティアにお願いしています。

○新たに地域ボランティアを募集するだけでなく、口コミで地域ボランティアが増えています。託児支援では、今まで幼児がいるため行事等に参加できなかった保護者から喜びの声が届いています。



竜王西小学校・託児の様子

■ 今後の展望・課題

○地域ボランティアの高齢化に伴い、次の世代へ移行することと、支援依頼が同一の人に集中しないように、広く地域ボランティアの人材確保をしたいと思えます。年2回、全戸配付している『応援団だより』で支援の様子を伝えたり、地域ボランティアの募集を行っています。

○平成26年に、竜王小学校のコミュニティ・スクールが立ち上がり、その母体として学校応援団の動きは非常に大きい存在です。今後も『開かれた学校、地域の子は地域で育てよう』を合言葉に、地域と学校が連携・協働し、学校応援団の活動を推進して行きたいと考えています。



応援団だより

[最初の第一歩として取り組みやすい事例]

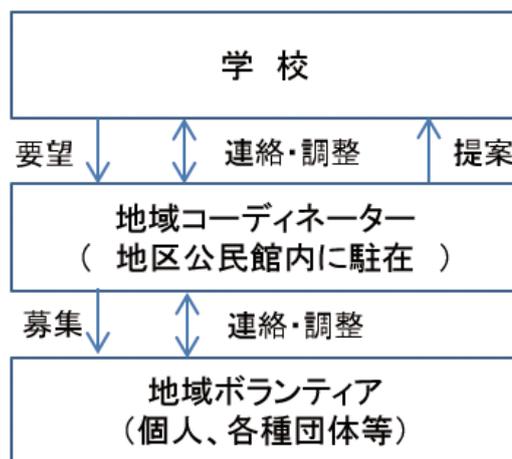
学校・家庭・地域が手を取り合って、地域の宝である子供を育てる

愛媛県伊方町／三崎中学校区学校支援地域本部

■ 活動の目的・概要

- 「人づくりがまちづくりの基本」という考えのもと、地域の人材を活かし、地域全体で学校を支援できる体制づくりを行っています。
- 中学校区内の小中学校（中学校1校、小学校1校）のニーズに合わせた活動を実施しています。
- 主な活動内容は、
 - ・登下校の見守り、安全指導
 - ・本の読み聞かせ ・花木の剪定、害虫駆除
 - ・学校行事の支援 ・地域学習の講師
 - ・料理教室の講師、補助等の学習支援 等です。

体制図



■ 活動の特徴・工夫

- 教員経験のあるコーディネーターが公民館に駐在し、公民館と連携することで地域の豊富な情報を得て、学校現場にマッチしたきめ細かい対応をしています。
- 町の主幹産業である漁業についての職業講話や、地域に伝わる織物（さきおり）の体験、郷土料理の「さつま」の調理実習等、地域特有の産業や伝統文化の体験等、地域のよさを伝える活動に力を入れています。
- ボランティアを募集するために、広報紙の発行だけでなく、公民館行事にコーディネーターも参加して情報収集やボランティア参加の呼びかけを行うなど、公民館と連携して関係団体に協力の呼びかけを行っており、児童・生徒数約130人に対して、約160人の方にボランティアとして参画していただいています。



地域に伝わる織物「さきおり」体験



ボランティアの活動を広報する、
「みさきっこ応援ボランティア新聞」(年3回発行)



昔の遊びや学校生活、地域の生活などを伝える

■ 立ち上げ当時

○まちの将来を担う子供達のために地域全体で地域の人材を学校で活かせる支援体制の構築を図ることを目的に、学校長、PTA、公民館関係者等による実行委員会を立ち上げました。

○立ち上げ当初は手探りの状態で、ボランティアの募集方法、学校への派遣方法、ボランティアの活動内容等ではいろいろと問題が生じていましたが、協議を重ね、コーディネーターが中に入り、入念に打ち合わせを行うことで、スムーズな活動ができるようになりました。

現在は

- ・学校からボランティアへの依頼や連絡は、基本的にコーディネーターが行う。
 - ・必要に応じて、学校・コーディネーター・ボランティアの3者で打合せを行う。
 - ・授業（事業）当日もコーディネーターが立ち会う。
- と、常にコーディネーターが仲介役として同席しています。



学校関係者、公民館等関係者等による
実行委員会の様子（立ち上げ当時の様子）

■ 展開・現在

○学校の支援については、公民館の協力を得ながらボランティアを確保でき、学校からの要望に対しての人材確保がスムーズにできるようになっています。

○参加したボランティアの方からは、「普段は子供たちと関わるのがすくないので一緒に活動できてよかった」という旨の意見が多く聞かれます。



郷土料理「さつま」作り体験
※さつま…魚のすり身を使った郷土の伝統料理

■ 今後の展望・課題

○ここ3年間で統合が進み、中学校区の小学校が3校から1校に減ったことで地域と学校との関わりや地域の活力が失われつつあるため、これまで以上に広く多くの方々に関わっていただけるよう方法を検討しています。

○この事業を通じて実績を積み上げていくことで、学校と地域のつながりを密にして、子供たちの教育環境の向上、地域の活性化に繋がるよう、連携・協働を進めていきたいと考えています。

○事業を行っていく上では、ボランティアの交渉や打ち合わせ等はコーディネーターが行うなど、学校関係者の負担軽減になるよう心がけています。



全中学生と小学6年生が、地域の高齢者からしめ縄づくり等を学ぶ。
(年1回・平日開催)

[地域住民の協力による学習支援の事例]

地域住民と学校が協力した中学校夜間補充教室（がんばらナイト）を運営

東京都葛飾区／葛美^{かつみ}中学校支援地域本部

■ 活動の目的・概要

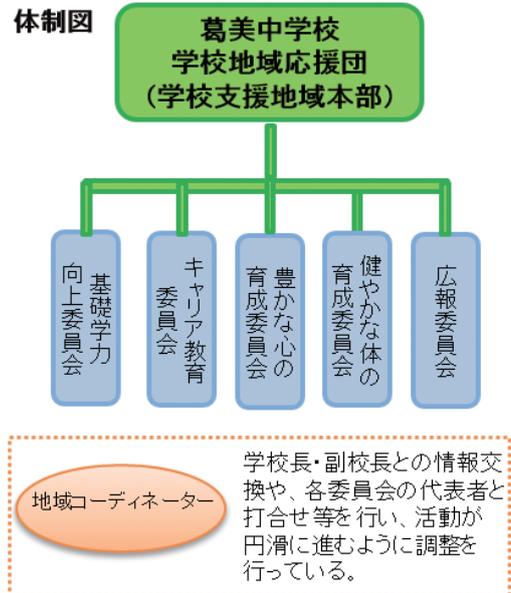
○目的

学校・家庭・地域が協力し合い、地域ぐるみで子供たちを育てる体制を整えることを目的に、平成22年度に葛美中学校支援地域本部を発足しました。

○概要

- (1) 基礎学力向上委員会：夜間補充教室（がんばらナイト）
- (2) キャリア教育委員会：3年生の面接指導
- (3) 豊かな心の育成委員会：生徒会と地区委員会の懇談会
：少年の主張大会審査員
：朝のあいさつ運動
- (4) 健やかな体の育成委員会
：農園を活用した食育の推進・花壇整備
：ロードレース大会協力
- (5) 広報委員会：広報紙「YELL」の発行

体制図



■ 活動の特徴・工夫

○夜間補充教室（がんばらナイト）

葛美中学校では、平成22年度から、学校支援地域本部において、無料の夜間補充教室（がんばらナイト）を実施しています。ボランティア（自治町会や保護者、青少年育成地区委員等の方々）の皆さんには、生徒来校時の受付やプリントの採点、登下校時の安全見守りといった形で協力してもらっています。

○地域コーディネーターの役割

青少年委員をコーディネーターとして配置し、学長・副校長をはじめとする学校の先生や、指導員、ボランティアの方々と密に連絡を取り合うことで、夜間補充教室（がんばらナイト）が安全、スムーズに運営できるように活動しています。

<対象> 中学1年生～3年生の希望者

<会場> 校舎の余裕教室

<年間活動日数>

約65回 学期中の週2回

19:00～20:35 (2時間程度)

<内容>

原則として、学校のワークブックを使用し、学習の基本は学年別に行う自主学習です。分からないところや解説して欲しい問題を指導員に質問する形式で実施しています。



活動中の教室の様子



講師から解説を受ける生徒

■ 立ち上げ当時

○学校地域応援団立ち上げのきっかけ

葛美中学校では、以前から、あいさつ運動や地域行事の参加協力等で地域と密接な関係を築いていました。また、学力向上を目指し夜間補充教室（がんばらナイト）を開催するにあたり、今まで以上に地域の協力が必要となったため、あいさつ運動等で活動している地域の方々の協力を得て、平成22年度に、学校地域応援団（学校支援地域本部）を立ち上げました。



応援団立ち上げ以前から行われているあいさつ運動

○当時の夜間補充教室（がんばらナイト）

開始当初は、予想を上回る参加生徒に戸惑い、生徒の対応についてスタッフの反省会が1時間以上に及ぶこともありました。生徒が勉強に集中できる環境づくりを目指すために、開催日を学年毎に分けたり、タイムカードを導入したりする等の工夫や人材確保のため、学校便りでボランティアの募集等を行いました。



開始当初は、新聞・TVでも報道された夜間補充教室

■ 展開・現在

○学校地域応援団の展開

現在、学校地域応援団の活動は、5つの委員会に分かれて活動しています。夜間補充教室（がんばらナイト）以外にも、3年生の面接指導や学校と地域の懇談会、農園活動等幅広い活動を地域の力を借りながら行っています。様々な活動を通じ、地域と生徒の距離が以前より近くなり、街中で生徒から地域の方にあいさつする姿も見られるようになりました。



地域の方に面接官をお願いして行われる面接指導

○夜間補充教室（がんばらナイト）の実績

平成27年3月現在、葛美中学校では延べ13,000人以上の生徒が夜間補充教室（がんばらナイト）を利用しています。また、平成26年には、安倍総理が教室の視察に訪れました。



安倍総理による夜間補充教室の視察

■ 今後の展望・課題

○今後の展望

学校地域応援団が発足してから6年が経過しました。かつて、夜間補充教室（がんばらナイト）に通っていた生徒が大学に進学し、初のOB講師としてスタッフの仲間入りをしてくれました。「良い学校づくりは、明るい未来の町づくり」をモットーに、今後も、地域と学校が連携・協働し、夜間補充教室（がんばらナイト）をはじめ、ひとつひとつの活動を充実・継続させていく予定です。



[放課後の安全・安心な居場所づくり]

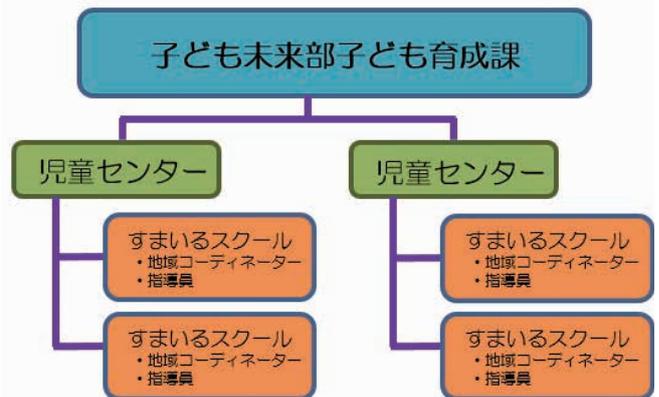
遊びも学びも友だちといっしょ！放課後のみんなの居場所

東京都品川区／第二えんざん延山小学校

■ 活動の目的・概要

- すまいるスクールは、「放課後子ども総合プラン」として「放課後児童健全育成事業」と「放課後子供教室」を一体的に運営する、品川区の「全児童放課後等対策事業」です。
- 学校施設を活用した安全な居場所を提供するとともに、学びと遊びを通して子供たちの成長を育みます。
- 「勉強会」、「教室」、「フリータイム」を中心に、多様な内容の事業を実施しています。

体制図



■ 活動の特徴・工夫

- 区内全公立小学校内（37校）で実施、区長部局の子ども育成課が所管し、教育委員会事務局と連携・協力して実施しています。
- 「勉強会」は、学校の授業と連携して、主に国語と算数の復習を行い、教員免許を持った指導員が、学習を指導しています。
- 「教室」はパソコンや野球など、体験的、趣味的な活動やスポーツなどを保護者や地域ボランティアの協力を得て行っています。
- 「フリータイム」は、宿題や読書で静かに過ごしたり、活動的に伝承遊びやスポーツをしたりするなど、クラスや学年を越えて、自由に過ごす時間としています。
- 児童について、指導員と学校教員との情報交換、授業の進捗状況を把握しての勉強会運営、学校の教育目標の事業への反映など、学校と一体化した教育を視野に入れたさまざまな対応を行っています。
- 教室への地域ボランティアの協力のほか、区内大学の学生従事や地域協力者の児童の見守りなど、区民と協働し、児童の地域貢献による循環社会を進めています。



囲碁教室の様子



■ 立ち上げ当時

- 平成13年当時、完全学校5日制が開始されることへの学力低下の懸念や、子供が巻き込まれる犯罪の発生、塾や習い事で遊ぶ友達がいないなど、地域で子供たちが遊ぶ姿が見えないなどの状況があり、品川区の教育改革の中で、学校・家庭・地域社会の連携づくりとして、事業が開始しました。
- 地域コーディネーターとして、児童センターで勤務していた児童指導職の正規職員を配置し、これまでの地域とのつながりを生かして、事業運営や地域ボランティアの発掘等を進めていきました。



受付の様子

■ 展開・現在

- 遊びや活動を通じて、クラスや学年を超えた交流をするなかで、さまざまなルールや協調性などの社会性を身につけ、人との関わり方の基礎を学ぶことができます。
- 地域ボランティアが講師を務める教室や地域貢献活動を通じて、校外でも挨拶をするなど、児童と地域の方とのつながりができています。
- 品川区では、学校選択制を導入しており、各校の教育活動のほか、就学する小学校のすまいるスクールの利用となることから、その活動内容も学校選びのポイントの一つとなっています。



お茶教室の様子

■ 今後の展望・課題

- 事業実施当時は、教育委員会の所管でしたが、青少年・児童に関する健全育成事業の組織を一本化し、地域での一体的な対応を図るため、平成25年度に「子ども未来部」に移管をしました。その目的を達成すべく、教育委員会および学校との連携だけでなく、家庭や地域と協働し、児童の健全育成を推進します。
- 平成28年度より、「放課後子ども総合プラン」を一体的に実施する事業として、運営時間をこれまでの6時までから7時までで延長します。（放課後子供教室としては、5時までの実施）



勉強会の様子

[NPO との連携・協働による取組]

地域で子供を育てる ～汐見アフタースクール～

東京都文京区 / 汐見アフタースクール運営委員会

■ 活動の目的・概要

「安全で豊かな放課後を日本中につくる」

～学校を活用し、地域と連携したアフタースクール～

放課後NPOアフタースクールは子供たちの「安全で豊かな放課後」を作るために生まれてきた団体です。その目的を達成するために「アフタースクール」という取組がアメリカにあることを知り、日本で2005年より活動を始めました。

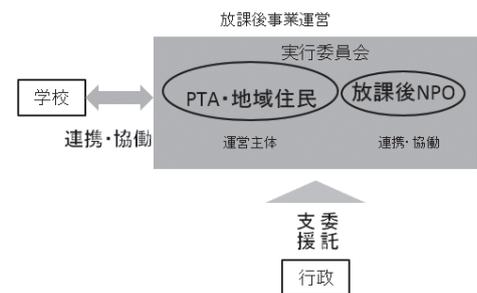
文京区では、放課後の教育活動を充実するため、地域住民やNPOと協力しながら、放課後の子供たちに居場所づくりに取り組んでおります。

汐見アフタースクールは2015年4月に開始した、保護者と地域住民が放課後NPOの協力のもと運営する実行委員会と文京区立汐見小学校が連携・協働して実施する取組です。

【アフタースクールの3つの特徴】

- ・ 学校で行う
- ・ 誰でも参加できる
- ・ 市民先生によるプログラムがある

体制図



■ 活動の特徴・工夫

○地域市民の力を生かした多様なプログラム

地域や社会にいらっしゃる様々な知恵や技術を授けてくれる大人たちを「市民先生」とお呼びし、放課後の学校で子供たちに多様な経験を届けています。とりわけ高学年でも意欲的に参加できるようなプログラムづくりをスタッフや講師で意見を出し合いながら試行錯誤し、生み出しています。団体全体では、地域の方からプロの方まで、これまでに2,000人以上の市民先生が参加してくださいました。



地元のプロ大工さんと建築プログラム

○インクルーシブ教育

アフタースクールは1年生から6年生まで、保護者の就労状況に関わらず、すべての子供たちが参加できます。さらに汐見アフタースクールでは、特別支援学級の子供たちも一般クラスの子と一緒に活動に参加しています。授業はバラバラに受けている彼らが、放課後の時間は一緒に過ごすことで、できないことがあればお互い自然に助け合える関係性を生み出しています。



異学年交流もさかん

○保護者の多面的参加

PTAに所属していない保護者の方もプログラムコーディネーターや現場スタッフ、あるいは会計や運営計画など様々な形で自主的に携わっているのが特徴の1つです。それぞれの活動は、放課後NPOのスタッフと保護者等のボランティアで参加してくださる方により運営しております。保護者だけでは運営できないところを、放課後の専門家である放課後NPOが支援しながら、週5日の運営を行っています。



保護者とNPOでタッグを組んで運営

■ 立ち上げ当時

STEP1

放課後活動の見直し

2014年夏、当時の放課後活動について、活動の充実に向けて見直しを検討。

STEP2

保護者×NPO ×行政の3者で調整

PTAを中心とした運営委員会と文京区、そしてNPOで協議調整を重ね、全保護者にアンケートを実施の上で了承を得、現在の運営形態を決定。

STEP3

アフタースクール開始

2015年春に汐見小アフタースクールを開始。



開校イベントは保護者も参加の巨大段ボール迷路づくり

■ 展開・現在

○安定したプログラム実施

子供たちのリクエストや地域のアイデアを生かしたプログラムを多数実施。特に数回、数ヶ月にわたって進行する継続プログラムでは年度末に子供たちが成果を発表し、それぞれの成長が感じられる素晴らしい結果となりました。

○人の成長

補助金での活動はスタッフの就業時間に制約がありますが、運営支援をしている放課後NPOが実施する研修に汐見アフタースクールのスタッフも積極的に参加することで開校当初に比べてさらにやりがいを感じられるとともに業務の効率化がみられるようになりました。

○市民先生の増加

単発で行うスペシャルプログラムの実施回数が増えたことに伴い、参加いただく市民先生の数も徐々に増えてきました。現在では来年度以降の課題として残る高学年の積極的参加をプログラムの工夫により図っています。



市民先生の話を聞く子供たち

■ 今後の展望・課題

◎保護者×NPO ×行政等の協働運営を充実！

今後は、放課後の子供たちの教育活動充実に向けて、保護者、NPO、学校、行政による協働運営をより一層充実させていきたいと思えます。

【展望】

本活動は、幅広い保護者の協力があってこそ成り立っています。今後は汐見小学校と地域との連携・協働を進め、より多くの保護者や地域住民等の積極的参加を促し、また内容についても高学年の参加がより増加するようなプログラムづくりをしていきたいと思えます。



[家庭教育支援]

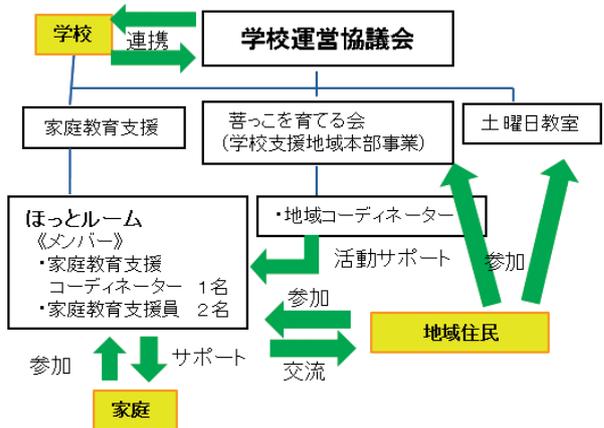
親と子供に寄り添い、見守り続ける「ほっとルーム」の活動

滋賀県湖南市／湖南市立菩提寺小学校

■ 活動の目的・概要

- 学校運営協議会の取組の一つとして、菩っこを育てる会（学校支援地域本部事業）と連携して、家庭教育支援の取組を実施しています。
- 民生委員等経験者や学校評議員経験者で構成された家庭教育支援チーム「ほっとルーム」のメンバーが、「菩っこはうす」という学校に隣接した施設を拠点として、保護者が悩みを共有できる場である『ほっとサロン』を運営しています。
- 地域コーディネーターが職員室に常駐しているため、教員や家庭教育支援コーディネーターがいつでも相談できる体制となっています。

体制図



■ 活動の特徴・工夫

- 家庭教育支援チーム「ほっとルーム」では、様々な取組を実施しています。
 - ・不登校傾向の児童の個別対応、保護者支援
 - ・『ほっとサロン』（保護者が悩みを共有できる場）の開設（毎週水曜日の午後）
 - ・保護者対応の勉強会、講演会の実施
- 『ほっとサロン』は参加者の有無にかかわらず、毎週開催しているため、参加したい人が参加したい時に気軽に訪れることができます。
- 家庭教育支援コーディネーターと地域コーディネーターが連携して活動することで、無理なくサロンを運営しています。
 - ・家庭教育支援コーディネーターの役割
活動計画の企画立案と実施
 - ・地域コーディネーターの役割
家庭教育支援コーディネーターがプランニングした企画を学校内に周知、活動のサポート
- 平成12年より不登校傾向等悩みがある児童を対象に行っていた「寄り添い支援」のボランティアが、家庭教育コーディネーターや家庭教育支援員としてサロンの運営を進め、必要な場合には寄り添う児童の様子を担任に伝えることで、学校と家庭をつなぐ役目にもなっています。



ほっとルームで行った茶話会形式の講演の様子



県のスクールソーシャルワーカーを招いた講演会の様子

■ 立ち上げ当時

- 学校内で児童が授業中に教室を出るなどの出来事がきっかけとなり、平成12年、学校との関係の深い当時の民生委員、学校評議員等の発案によって学校内の「寄り添い支援」の活動がスタートされました。校内の一室を利用し、昼休み等子供が自由に入室し話を聞いてもらえる場を設けることにより、子供たちのカウンセリングを中心とした寄り添い活動の取組を始めました。
- その後、学校支援員等の配置が充実されてきたこと、保護者支援の重要性が認識されるようになったことなどから、学校と寄り添い支援担当者で協議し、平成25年度からは、支援対象を保護者として支援活動を展開することとして、家庭教育支援の取組を始めることとなりました。これまでの経過を踏まえ、家庭教育支援コーディネーターは、これまでの学校内の寄り添い活動を進めてこられた元民生委員の方に依頼し、家庭教育支援員は、同じく寄り添い活動にあたってこられた元学校評議員、元主任児童委員等の方の協力を仰ぐこととして、『ほっとサロン』の体制を作りました。
- 活動内容については、学校、学校支援地域本部、ほっとルームのメンバーで会議を持ち、学校や家庭との連携方法などについて、話し合いをして決定しました。

■ 展開・現在

- 家庭教育支援チームが、保護者の悩みを共有、学校での児童の様子を保護者に伝え、学校側に橋渡しする取組を行うことで、地域による学校支援及び家庭教育支援の充実につながりました。
- 子供の寄り添い活動や学校支援員を経験した方が家庭教育支援コーディネーター・支援員となったことや、学校支援地域本部事業の地域コーディネーターが常駐していることにより、学校支援と家庭教育支援の連携が円滑に行われています。
- ボランティアや保護者が集まる空間ができたことで、時には子供たちが下校途中に「昔っこはうす」に立ち寄り、コーディネーターや支援員などと交流するようになりました。
- 保護者からは、「聞いてもらうことで気持ちにゆとりができ、リフレッシュできる」という旨の意見が聞かれるようになりました。



活動拠点 「昔っこはうす」

■ 今後の展望・課題

- 温もりのある学校を目指し、今後も家庭教育支援と学校支援地域本部事業が連携・協働しながら、ほっとルームの活動を継続し、その活動を通して、学校、家庭、地域をつなげ、家庭教育の更なる充実を目指していきます。また、支援者として活動できる方（子育てを終えた世代の方等）の発掘を進める必要があります。
- 多くの方に参加していただけるよう、保護者への活動PRの方法を検討しています。具体的には、気軽に、自然と集まる中で子育ての悩みなどを話せるように、PTA行事との同日開催やものづくりの会などの企画をしていく予定です。



滋賀市小学校 日曜日 申込日 日 日

「座布団作り」申し込み

2月	月	火	水	木	金
1	2	3	4	5	
6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29
30	31				

参加する日の欄に活動される希望時間を円書きください。
 ~活動時間~ 月曜日 8:30~14:30
 火曜日~金曜日 8:30~15:30
 上記の時間内で活動していただけます。

お名前 _____
 児童名 _____
 連絡先 _____
※お子さまの学年欄にお書きください。

活動参加募集チラシ（座布団作り）

[学びによるまちづくり]

学区ブランド産品「富より団子」がつなぐ学校と地域

奈良県奈良市／^{とみお}富雄中学校区学校支援地域本部

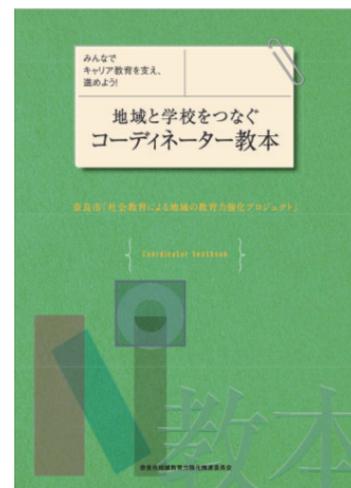
■ 活動の目的・概要

- 地元の資源に着目し、農産物やその加工品に対し、ネーミングやパッケージの企画開発をし、又「展示」「販売」を目的としたPR方法を考える「学区ブランド産品開発プログラム」に、中学校区に設置された地域教育協議会や運営委員会で活動する地域コーディネーターが集まり、子供たちとともに取り組みました。
- 地域コーディネーターと学校が協力して「生きたキャリア教育」に取り組むことにより、学校地域連携のさらなる発展を目指しました。



■ 活動の特徴・工夫

- 平成20年度より全市(公立 幼・小・中)で文部科学省の「学校支援地域本部事業」を始めましたが、事業をすすめる中で、各校区におけるコーディネーター人材の有無や必要とされるコーディネート機能等の違いが事業効果に温度差を生じさせてくるようになりました。さらなる事業推進には中核となるコーディネーターの育成が欠かせないことから、文部科学省の実証的共同研究などに参加しながら、市内各地域で地域連携活動をすすめました。
 - 初年度は富雄中学校区内の一つの小学校である鳥見小学校の5年生が「総合」の時間を使って取り組みました。「古代米」に着目し、白米に混ぜる『う米米(うまいまい)』を考案し、「奈良のお土産として」をテーマにCM作成、チラシ作り、パッケージデザインに取り組みました。
 - 次年度は小学校での取組を富雄中学校が引き継ぎ、古代米を使ったお菓子作りに有志で集まった40名の生徒と地域コーディネーターが10種類以上のお菓子の試作に取り組み、商品を「古代米をまぶしたゴマ団子」に決定しました。
- その後「ただの手作りにとどまらず、近隣のお店で 売ってもらえるような商品」を目指して取り組みました。
- 商品開発、ネーミング、チラシ、パッケージの各チームに、2,3名のコーディネーターが担当として付き添い、地域の団体や近隣の製造、小売り関係にお勤めの方など、たくさんの方々に相談することによって、商品化・販売に結び付くように応援いただきました。また、学校の教員からは取組へのアドバイスが加わり、地域と協力企業、学校が一体となった活動になりました。
 - ゴマ団子は「和菓子バージョン」と「中華菓子バージョン」を作ることとなり、和菓子バージョンは、老舗和菓子店の協力による制作が決定し、さらに中華菓子バージョンは、株式会社の協力で冷凍食品としての制作が決定しました。



研究成果物
「コーディネーター教本」
<http://manabi-mirai.mext.go.jp/report/2010.html>



中華菓子バージョン

■ 立ち上げ当時

- 平成22年度、コーディネーターのスキルアップも目指していることから、活動に直接かかわるのは管理職とコーディネーターとし、他の教職員には関心をもって温かく見守っていただけるよう、職員会議で説明しました。
- 生徒の意見やアイデアを尊重しつつも「販売」につなげるための厳しさも学習しました。
また、多くの方々へ助けていただきながら、地元企業を中心に協力企業をコーディネーターが手分けして探しました。企業の方々も中学生の言葉に真剣に耳を傾けていただき、地域の子供たちの成長のためという想いを共有できたことから、地域の教育力を実感できました。



企業へのプレゼンテーション

■ 展開・現在

- 単年度のプログラムであったため、生徒のプロジェクトチームは平成23年度末で解散し、その後の取組を新しく設立した部活動「ボランティア部」が継承しました。
- ボランティア部だけでなく、全校生徒の財産として引き継いでいくため、キャリア教育の材料としても活用しています。また、生徒の発案により実施したアンケート調査から「給食への採用」の意見が多数あり、市長、教育長へのプレゼンテーションを経て学校給食のメニューとして採用が決定しました。



奈良市長・教育長へ『富より団子』給食採用のプレゼンテーション

これらの取組は、子供たちの学びを支援することはもちろん、企業・団体や住民にとっても地域参画のきっかけ、学びの機会となっており、子供たちと共に育つ地域づくり（地域振興）が進んでいる。

■ 今後の展望・課題

- 中華菓子バージョンを製造時に使用した油を利用し、ボランティア部と「放課後子ども教室」が共同で『エコ石けん』を作りました。
また、ユニセフへの寄付を目的にチャリティー販売を行ったり、中学校敷地内で栽培した「古代米」のワラを使って『しめ縄』を作るなど、『富より団子』の製作プロセスから派生した新たな取組が進んでいます。
- 地域と学校が連携した『富より団子』の取組が様々な取組へと発展しています。これらの教育プログラムの開発を通し、地域におけるコーディネーターの発掘・育成が進んでいます。この『富より団子』の取組も、地域の財産として継承するためにさらに発展した活用を考えています。



小中合同しめ縄づくり

[学びによる地域貢献]

地域と学校が互いに支え合い高め合う、ボランティア活動

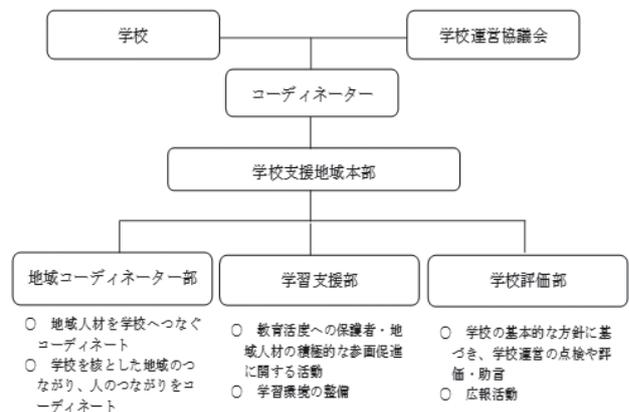
みやこのじょう
宮崎県都城市／山田中学校支援地域本部

■ 活動の目的・概要

○平成25年度に、山田中学校は学校経営ビジョンの柱の中に「キャリア学習」と「地域貢献」を掲げました。

そこで、生徒の体験学習を充実させるために、協力していただける施設や人材を紹介したり、生徒が安心して体験学習に取り組めるよう見守りをするとともに、多様な人と関わることで、生徒の視野を広げることがねらいとして学校支援地域本部が組織されました。発足当初より学校の諸活動へボランティアが参加しています。

体制図



■ 活動の特徴・工夫

○総合的な学習の時間を活用し疑似体験活動（車いす体験）等のキャリア教育へのサポートをしています。生徒が安全に体験活動できるように、生徒の活動の見守りや補助をしています。

○生徒が学校行事、お祭りなど地域行事へ積極的に参加できるように、中学校の生徒会担当の教員に行事一覧表、ボランティア活動やボランティア講習会等への参加募集のチラシを提供し、参加者を募っています。

○ゲストティーチャーにおける授業では、教師からその授業（活動）に対するねらいや目的、内容、時間配分等の要望を聞き、ゲストティーチャーとしてふさわしい地域人材を紹介しています。

○土曜学習会における補充学習支援等をしています。講師は福祉協会を通して、退職した先生にお願いするとともに、宿題や生徒のわからないところを教えています。また、ボランティアの会の会員が1名つき、参加生徒の把握や健康管理を行っています。中には学習面以外の相談をしてくる生徒もいます。

○社会福祉協会との連携を強めることで高齢者福祉施設訪問など多くの支援ができるよう工夫しています。（福祉施設訪問、職場体験学習等）このような取組に協力していただける施設を探し、生徒受入の交渉をしています。



車いす疑似体験へのサポート



ボランティアを題材とした劇による意識付け

■ 立ち上げ当時

- 山田中学校の生徒は、素直な生徒が多いが、集団の中で主体的に判断し、積極的に物事に取り組む生徒が多いとは言えない状況でした。そこで、学校では、生徒個々人の自尊感情を高め、自己の存在感や集団への所属感を実感させるとともに、コミュニケーション能力を育成することが課題解決につながると考え、学校からの要望で学校支援ボランティアが組織されました。
- コーディネーターは地区のボランティア団体の代表の方をお願いし、学校と地域団体との連携を図りました。



地域ボランティア団体との連携

■ 展開・現在

- 学校支援ボランティアの会の発足により、保護者や地域住民の、学校との連携や学校への支援に対する認識が深まり、「福祉体験活動・福祉施設訪問・職場体験学習・ボランティア活動」など、学校への支援活動がより活性化してきています。
- 生徒のボランティアや地域貢献への意識が高まり、地域行事参加やボランティア参加の募集があると、多くの生徒が希望するようになりました。
また、生徒総会での全校討議を「思いやりの心を育てよう～ボランティア活動を通して～」とし、生徒みんなが参加出来るボランティアについて話し合い、朝の清掃ボランティアやあいさつ運動に取り組んでいます。



宮崎県人権啓発大会の会場でのボランティア

■ 今後の展望・課題

- 学校支援ボランティアの会を継続し、充実した活動を実践していくには、メンバーの確保が課題です。
- 学校の諸活動に、ボランティアの会の方に参加してもらうことで、学校教育活動が充実するとともに、生徒のコミュニケーション能力等が高まることを期待できます。
- 学校と地域が連携・協働し、教育活動に関わることで、地域の方々の生き甲斐になり、地域が活性化することが期待できます。



体育大会ではボランティアの会や地域の方々が踊りに参加

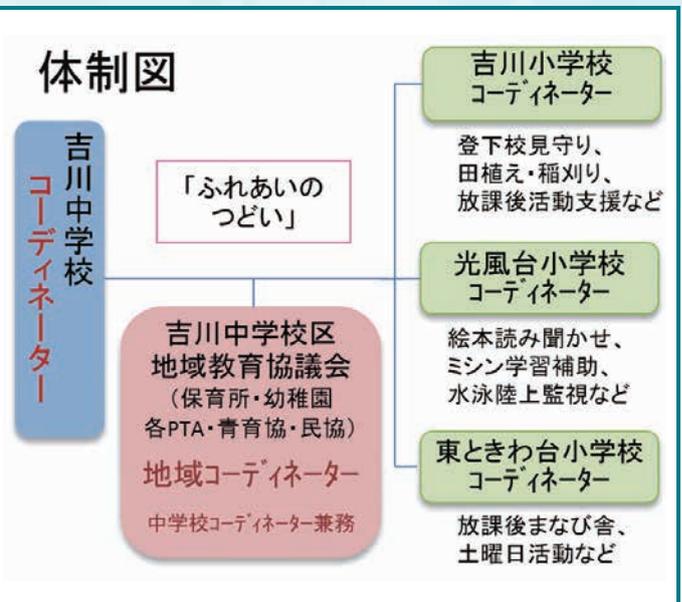
[社会福祉関係機関等との連携・協働]

“かゆいところに手が届く活動”で、未来に続く人づくり

大阪府豊能郡豊能町／豊能町立吉川中学校区学校支援地域本部

■ 活動の目的・概要

- 3小1中の中学校区が関係しています。（豊能町立吉川中学校、吉川小学校、光風台小学校、東ときわ台小学校）
- 平成21年度より、学校の活性化を目的に学校支援地域本部を立ち上げました。各小・中学校にはPTA経験者など地域に人脈を持つコーディネーターが1人ずつ配置され、学校と地域との連携のシステムを構築し、地域のマンパワーの発掘に力を注いでいます。
- 学校、PTA、地域、福祉関係の各種団体の協力による中学校区フェスタ「ふれあいのつどい」を毎年開催し、児童・生徒が主役となるよう取り組んでいます。



■ 活動の特徴・工夫

- 3年生保育体験の事前学習のために絵本の読み聞かせの手法を朗読ボランティア団体のメンバーが伝えました。受験を控えてストレスを抱える生徒たちと心和むひとときを共有できています。
- 中学校では、放課後や長期休業中の学習支援を中学校の教育実習を経験した学生ボランティア、地域人材で実施し、府教委作成の学習教材を活用しながら自学自習力育成を目指した取組を行っています。また、野球・ソフトボール・卓球など、部活動の指導の支援もしています。
- 4名のコーディネーターは日常的に連絡を取り合って情報を交換しています。中でも中学校のコーディネーターは、コーディネーターのまとめ役を務めるとともに、地域コーディネーターとして「ふれあいのつどい」の運営を担うなど、地域の諸団体とをつなぐ要の役割をも果たしています。
- 学校のニーズをしっかりと把握するため、小学校では地域人材と学校の教職員が話し合う場を設定し、年間予定の立案や年度末の総括を行っています。コーディネーターは学校の応援団としてのボランティアを掌握し、常に学校の求めに応じるコーディネートを中心にしています。
- 3小1中が総力をあげて取り組むのは、11年目を迎えた校区フェスタ「ふれあいのつどい」です。毎年、各学校園所、各PTA、民生委員・児童委員、ボランティア連絡会、社会福祉協議会等の団体が、会議を重ね実施していることで、地域を顔見知りの関係に導いて活動の下支えをしています。



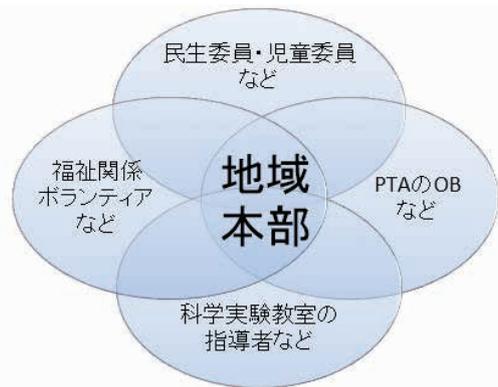
教職を目指す学生による学習支援のようす



中学校区と地域の福祉団体が共催する「ふれあいのつどい」中学校吹奏楽部の演奏で盛り上がります

■ 立ち上げ当時

- 吉川中学校区にはもともと各校が把握するゲストティーチャーが出前授業を行うなどの地域からの支援がありました。ボランティア人材を町内で登録・管理するも、活用のフィールドは限られていました。
- 学校支援地域本部の立ち上げとともに、各校でPTA役員経験者などのコーディネーターが配置され、ボランティアの情報を掌握する体制ができました。
- 配置されたコーディネーターが、各自が持つ地域とのつながりを活かすことで、ボランティアの人脈が広がりました。民生委員、福祉団体、PTA経験者、科学実験の指導者など様々でした。



■ 展開・現在

- 学校の教育活動への地域の日常的な支援が定着し、児童・生徒は、地域の方々が日常的に学校に出入りされている中で、自然にあいさつを交わせるようになるなど、子供と地域の大人との「ナナメの関係」が育ってきています。
- ボランティアのスキルを活かした授業支援に加え、登下校の見守り・環境整備・放課後学習や居場所づくりなど、地域が学校の応援団となり学校と地域が手を携えることで、より豊かな教育環境づくり、子供の育みを行っています。
- 日常の活動や行事などを通じて、地域の中で学校への理解が深まり、学校を身近なものと感じています。校区の子供たちを見守る地域の目はあたたかいものです。
- 中学校吹奏楽部が地域の行事の応援に出向いたり、小学生が防災や認知症についての学習を受けるなど、学校教職員を含めての地域参加や協力も活性化しています。
- 保護者が地域ボランティアと顔見知りになり、地域であいさつが交わされるなど、学校支援活動を通じて、つながりのある地域づくりにも貢献できてきています。



グラウンドから下りる階段を補修する民生委員さんたち



魚釣りを手作りして遊ぶ放課後活動のようす

■ 今後の展望・課題

- 長年ボランティアの支援を受けて育まれた子供たちが自分以外の人とかかわり、コミュニケーション力を高めることで、後に続く人材が豊かに育っていく地域になることを願っています。
- 住宅街が主である地域がら、つながりやまとまりが築きにくいように感じます。個別の活動から総合化・ネットワーク化に向けて、今後も、核となる人材を育て、人と人とのつながりをまとまりのあるものに醸成していけるよう、活動を通じて発信していきたいと思ひます。



「ふれあいのつどい」で幼児を見守る中学生ボランティア

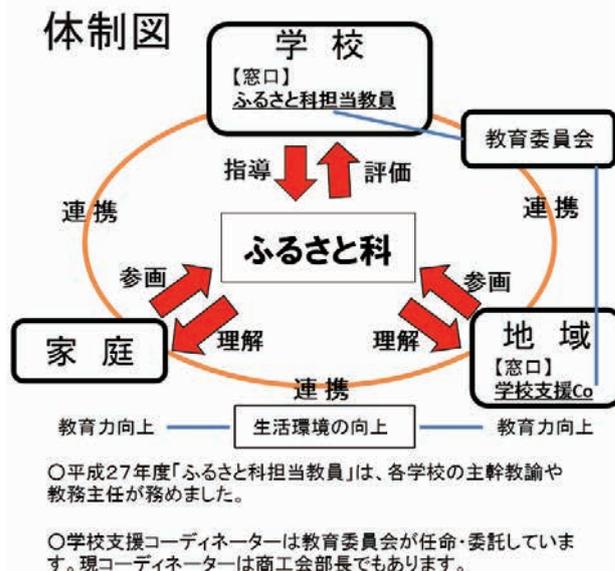
[地域人材の育成]

「ふるさと科」を核として学校・家庭・地域が連携・協働する教育活動

岩手県大槌町 / 大槌町教育委員会

■ 活動の目的・概要

- 東日本大震災津波により大きな被害を受けた大槌町では、この震災から立ち上がる復興・防災を基盤とした「生きる力」「ふるさと創生」の教育を推進し、ふるさとの将来を担う人材の育成を目指しています。
- そのために、従来の教育システムをさらに充実させ、小学校と中学校がより連携を深め、学校・家庭・地域が一体となって子供たちを育む仕組みとして「小中一貫教育」を導入し、その柱として「ふるさと科」を創設しました。
- 「ふるさと科」は大槌町独自の学習領域です。文部科学省に教育課程特例校の指定を申請し、生活科と特別活動の一部と総合的な学習の時間の全てを充てて実施しています。



■ 活動の特徴・工夫

○「ふるさと科」の推進にあたっては、以下の3つの柱を中心に学習を進めています。

柱①【地域への愛着を育む学び】

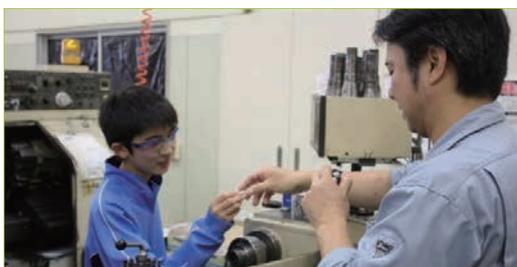
『郷土芸能発表会』（吉里吉里学園）

発表会には、200人以上の保護者や地域住民が来場。地域の文化・郷土芸能を学ぶことで郷土を愛する心を育成しています。

昨年度に引き続き、地域住民と生徒らが高学年児童の指導にあたりました。今年度は3年生の児童が郷土芸能について調べた内容も発表しました。



郷土芸能発表会



職場体験学習

柱②【生き方・進路指導を充実させる力を育む学び】

『職場体験学習』（大槌学園・吉里吉里学園）

仮設商店街、スーパーマーケット、老人介護施設等、町内50カ所の事業所の協力をいただき実施。各事業所とは学校支援コーディネーターが連絡をとり、一覧表にして学校に情報提供します。

生徒約200名がそれぞれ希望した職場で体験しながら学ぶ過程で、生き方や進路を考えさせるとともに、主体的に将来を切り開く能力を育成しています。

柱③【防災教育を中心とした学び】

『防災週間の取組』（吉里吉里学園）

町役場の福祉課から日本赤十字社の方を紹介いただき、講師として招聘してAEDを活用する救急救命法を学んでいます。

また、実際に防災サイレンを鳴らしてもらう等、消防署にも協力いただいで、地域住民も参加する合同避難訓練を実施しています。

これらの取組の過程で、防災に対する理解を深めさせるとともに、災害時における主体的な判断力と実践力を育成しています。



防災週間の取組み

■ 立ち上げ当時

- 「ふるさと科」開設時、学校・家庭・地域それぞれの代表者による会議を実施。漁業関係者や郷土芸能に携わる地域住民からは後継者育成の問題について意見が出される等、活発な議論がなされました。「ふるさと科」を推進していく上で今後も学校のみでなく、家庭や地域住民の願いを取り入れていくことが大切だと確認しました。
- 「ふるさと科」に係る会議の中で、大槌町と提携している大学関係者から、「地域人材を効果的に活用しながら『ふるさと科』を充実させるには、地域と学校をつなぐ『学校支援コーディネーター』の設置が必要である」との助言を受けました。
- 以前から大槌町に居住し、各関係機関等ともつながりのあるコーディネーターに適任の方を1名確保できましたが、もう1名がなかなか見い出せず、NPO団体に1名派遣依頼しています。



「ふるさと科」に係る会議

- 【「ふるさと科」に係る会議の構成員】
- ・地域住民
 - ・大槌町役場職員
 - ・各小学校長
 - ・大学関係者
 - ・漁協、商工会等の代表
 - ・各学校保護者代表
 - ・外部有識者
 - ・教育委員会事務局 等

■ 展開・現在

- 現在も「ふるさと科」に係る会議は、学校・家庭・地域それぞれの代表メンバーにより構成されています。メンバーの選定にあたっては、教育委員会が学校支援コーディネーターと各学校に依頼し、推薦していただいています。
会議を重ねるたび「ふるさと科」に対する理解はあっという間に深まっており、学習内容をさらに充実させる方法等について検討を続けています。
- 学校支援コーディネーターが各学校の計画に沿って、たくさんの地域人材と連携・協働する機会を設定しています。地域の先生となったボランティアの方からは「子供たちと関わりを持ってうれしい」「学校との距離があっという間になった」等の声が聞かれました。
- 今年度、教育委員会が実施したアンケート結果によると、「ふるさと科の学習が好き」と回答した児童・生徒は8割以上でした。



「ふるさと科」の授業風景
～「新巻鮭」づくり～

■ 今後の展望・課題

- 今年度、主に「ふるさと科」で活用するリーフレットを作成しました。このリーフレットの編集にあたっては、学校・家庭・地域のメンバーで構成される会議を開催しました。次年度は具体的な活用方法等を検討し、「ふるさと科」のさらなる充実を目指します。こうした取組が復興に向かい日々変化する地域のコミュニティのつながりとなり、家庭・地域の教育力と生活環境の向上を図っていくと考えます。
- 学校と地域の連携・協働体制を継続するため、引き続きコーディネーターを設置するとともに、現段階でつながりが希薄な家庭との連携強化を図る方法等を考えていきます。
- 「ふるさと科」に係る会議等に、今後も大学関係者等の参加を促し助言をいただくとともに、子供たちが主体的に参画できる体制を考え、実施していきます。



「ふるさと科」リーフレット

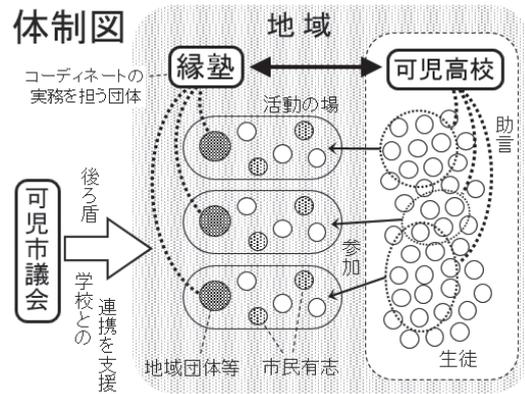
[高等学校における地域との連携・協働の取組]

エンリッチ・プロジェクト ～ 高校と地域の一体的な再生 ～

岐阜県^{かに}可児市 / NPO縁塾、可児市議会、可児市諸団体、岐阜県立可児高等学校

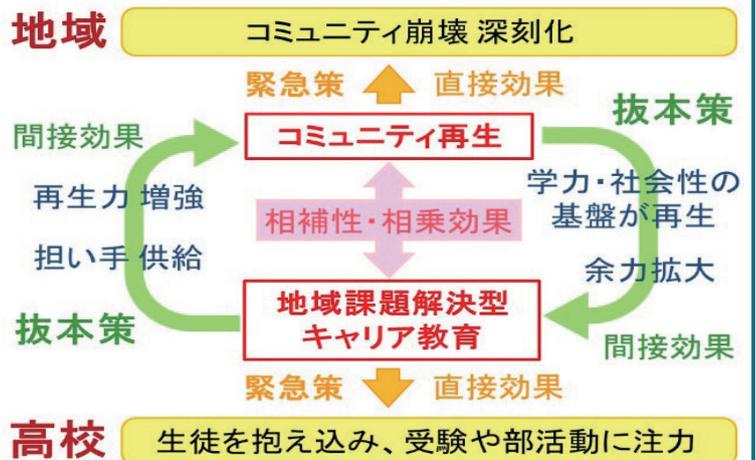
■ 活動の目的・概要

- 可児高校が地元有志に「学力向上・キャリア保障・地域再生を一体的に展開しよう」と、「地域課題解決型キャリア教育」を持ちかけたのが始まりです。
- 地域をよくしようと活動する団体等の大人や大学生と交流したり、地域課題を解決するプロジェクトと一緒に進めたりする活動を通して、学習意欲や地域の将来への当事者意識を高める高校生が現れはじめています。



■ 活動の特徴・工夫

- 長期休業等に高校生と大人が地域で活動を共にできる場を多様に設けた結果、お互い元気になった例が数多く登場しています。
- 高校は、キャリア教育の一部を地域（社会教育）に委ねることによって、生徒の学習意欲向上や教職員の負担軽減をはかり、いっそう充実した教科指導や受験指導を実現できる余地が拡大しつつあります。
- 地域は高校生を受け入れることにより、「将来は地元のために頑張ろう」という想いを持たせ、大学卒業後に地元へ帰ってくる若者を確保できる手応えを強めています。
- 学校や市役所が主導する体制は人事異動の影響が大きいため、コーディネートの実務を担う組織として「縁塾」が設立されました。
- 以上、社会教育と高校教育がハイブリッドで機能する仕組み、高校と地域の互惠関係、地域主体の運営体制を築いた点に、大きな特徴があります。
- 平成28年春には、プロジェクトの一環として、18歳選挙権の施行に伴う主権者教育プログラムを可児市議会・可児高生・縁塾のメンバーが共同で企画・運営し、好評を博しました。



「子育て応援フェスタ」で、来場した子供に読み聞かせ

■ 立ち上げ当時

- 担当教員の仲介で、可児市職員有志が講座等を年休で引き受けてくれました。当初、学校地域連携に慎重で、活動に参加する生徒はごく少数の希望者のみでした。
- 平成25年冬、議会改革に熱心な市議会とつながることができて、強力な後ろ盾を得るとともに、地元諸団体と高校との仲介を担ってもらえて、地域連携に弾みがつきました。
- 同じ頃、医療福祉系の多様な職種の現職や学生と交流した生徒が大きく成長した姿を見て、学校の理解も少しずつ広まりました。



「広報かに」平成26年4月1日号
可児高校の地域課題解決型キャリア教育「エンリッチプロジェクト」を行っています。このプロジェクトの目的や内容について取り上げます。

■ 展開・現在

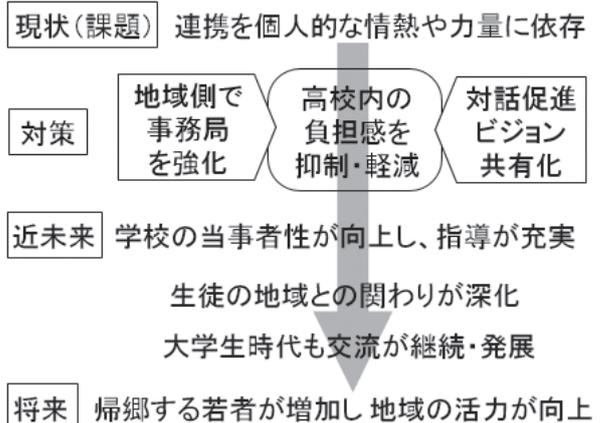
- 協働事業の重要性に対する地域の理解が深まり、人材の発掘や組織化が進行。平成27年春、コーディネートの実務を担う団体として「縁塾」が設立されました。
- 縁塾の熱心な働きかけにより、同年夏、地域で頑張る大人や大学生を講師とする71のプログラムが実現。可児高校1年生全員が何らかに参加し、地域との距離を縮めました。
- 秋以後、活動意欲を高めた生徒は関係団体に分散して11のプロジェクトを企画。翌春の活動には延べ100名以上が参加しました。



「求む！ 未来の可児市職員」行政クロスロード

■ 今後の展望・課題

- 高校在学時に地元経営者等との交流を深め、地域課題の解決や、地元での就職・起業を視野に力強く進学した卒業生が帰郷し、活躍する地域にしていくのが念願です。
- そのためには、関係者間でビジョンを鮮明に共有するとともに、学校がもっと地域と連携・協働に踏み込めるよう、連携・協働に対する負担感（校外との連絡調整・既存の取組との擦合せ・ルールの変更や創設等）を最小限に抑制できる運営体制を確立していくことが課題となります。



〔「熟議」を取り入れた学校と地域の連携・協働の取組〕

小・中一貫教育による9年間の児童・生徒の健やかな成長と発達を目指して

東京都三鷹市／三鷹中央学園

■ 活動の目的・概要

三鷹市では、法的な権限と責任を有する「学校運営協議会」を全ての学校に設置し、小・中一貫教育を行う学園には「コミュニティ・スクール委員会」を設置しています。

市民による学校運営への参画、教育活動への支援をはじめ、さまざまなコミュニティ・スクールとしての取組をとおり、義務教育9年間の児童・生徒の健やかな成長・発達、「人間力」「社会力」の育成をめざしています。

学校・家庭・地域がそれぞれ当事者意識をもち、「ともに」手を携えて教育にあたるシステムです。

三鷹中央学園とそれを取り巻く2つの地域



■ 活動の特徴・工夫

○三鷹中央学園パワーアップアクションプラン

コミュニティ・スクール委員会では、学園のめざす方向を学校と共有し、保護者・地域の声が反映された学校運営であるか、学校や子供たちの課題は何か、解決に向けてどのように取り組むのか等を、四中・三小・七小に通う全ての学園生の健やかな成長を願いながら議論を深めています。

みんなで知恵を出し合って完成した「三鷹中央学園パワーアップアクションプラン」は、4つのめざす学園生像を実現させるために、学校・家庭・地域、そして子供たち自身が「できること」を具体的に示した行動指針です。

それぞれの立場で「熟議」を行い、評価結果などを参考にし、毎年度、このプランを更新しています。

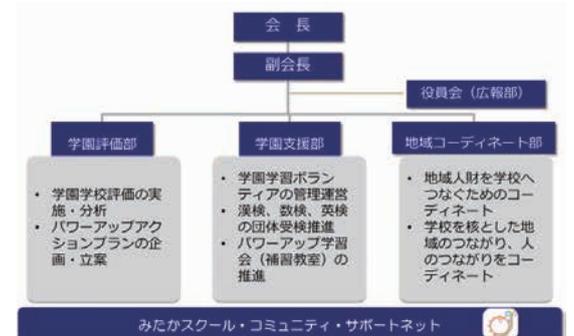
○学園及び各学校の具体的方策に対しての学校支援

学校の「やりたい！」を実現させるために、教育支援ボランティアに関わっていただいています。

毎年5月ごろに先生方とCS委員会との懇談会を開催し、先生方から「やりたい！」ことを出してもらいます。学校運営協議会では、それが「学校の基本方針に沿っているか」、「教育目標（めざす生徒像）の実現にどうつながるか」、「継続可能な支援の在り方かどうか」を協議し、進む方向性が決まったら、年間を通して計画的に支援を実施します。

一般的な授業サポートは「学園学習ボランティア」へ。ゲストティーチャーや地域人財の手配はコミュニティ・スクール委員会が行いますが、課題への対応が必要な場合は、「みたかスクール・コミュニティ・サポートネット」へ相談をします。

三鷹中央学園 【めざす学園生像】	学校での取組	子どもの取組	家庭での取組	地域での取組
すすんで学ぶ人 豊かな学力をたくむ	1. 教科書を読み解く力を養育する 2. 読解力向上を図るための教材を編み出し、授業に活用する 3. 読解力向上を図るための教材を編み出し、授業に活用する	1. 教科書を読み解く力を養育する 2. 読解力向上を図るための教材を編み出し、授業に活用する 3. 読解力向上を図るための教材を編み出し、授業に活用する	1. 家庭での学習環境を整える 2. 家庭での学習環境を整える 3. 家庭での学習環境を整える	1. 家庭での学習環境を整える 2. 家庭での学習環境を整える 3. 家庭での学習環境を整える
感謝と思いやり の心をもつ人 豊かな人間性をたくむ	1. 感謝の心を育てるための教材を編み出し、授業に活用する 2. 感謝の心を育てるための教材を編み出し、授業に活用する 3. 感謝の心を育てるための教材を編み出し、授業に活用する	1. 感謝の心を育てるための教材を編み出し、授業に活用する 2. 感謝の心を育てるための教材を編み出し、授業に活用する 3. 感謝の心を育てるための教材を編み出し、授業に活用する	1. 家庭での学習環境を整える 2. 家庭での学習環境を整える 3. 家庭での学習環境を整える	1. 家庭での学習環境を整える 2. 家庭での学習環境を整える 3. 家庭での学習環境を整える
たくましい心と 体をもつ人 心身の健康をたくむ	1. たくましい心と体をもつための教材を編み出し、授業に活用する 2. たくましい心と体をもつための教材を編み出し、授業に活用する 3. たくましい心と体をもつための教材を編み出し、授業に活用する	1. たくましい心と体をもつための教材を編み出し、授業に活用する 2. たくましい心と体をもつための教材を編み出し、授業に活用する 3. たくましい心と体をもつための教材を編み出し、授業に活用する	1. 家庭での学習環境を整える 2. 家庭での学習環境を整える 3. 家庭での学習環境を整える	1. 家庭での学習環境を整える 2. 家庭での学習環境を整える 3. 家庭での学習環境を整える
地域・社会に 貢献する人 地域を豊かにする力をたくむ	1. 地域・社会に貢献するための教材を編み出し、授業に活用する 2. 地域・社会に貢献するための教材を編み出し、授業に活用する 3. 地域・社会に貢献するための教材を編み出し、授業に活用する	1. 地域・社会に貢献するための教材を編み出し、授業に活用する 2. 地域・社会に貢献するための教材を編み出し、授業に活用する 3. 地域・社会に貢献するための教材を編み出し、授業に活用する	1. 家庭での学習環境を整える 2. 家庭での学習環境を整える 3. 家庭での学習環境を整える	1. 家庭での学習環境を整える 2. 家庭での学習環境を整える 3. 家庭での学習環境を整える



■ 立ち上げ当時

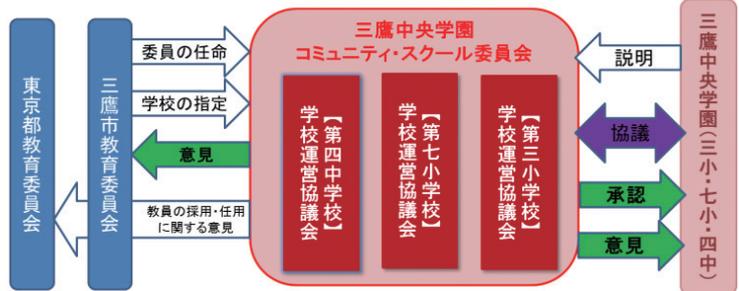
○コミュニティ・スクールを基盤とした小・中一貫教育

三鷹中央学園の3つの学校、第四中学校・第三小学校・第七小学校は、地域の学び舎として、半世紀以上の歴史を刻んできました。いつの時代も、この地域の人々の輪によって子供たちは育まれてきました。「人の輪のつながり」は、この四中学区の大きな財産です。

その良き伝統を受け継ぎ、平成21年4月、コミュニティ・スクールを基盤とした小・中一貫教育校「三鷹中央学園」が開園しました。

以来、コミュニティ・スクール委員会を学校・家庭・地域の架け橋として、「地域とともにある学校」づくりに取り組んできました。

コミュニティ・スクール委員会 = 学校運営協議会



■ 展開・現在

○学園と地域の協働による取組 ～防災授業～
みたかスクール・コミュニティ・サポートネットやコミュニティ・スクール委員会・市の防災課・住民協議会の皆さんの御支援のもと、学園防災副読本「カンガエル地域防災」を踏まえて、9年間の系統性を意識した「防災授業」を学園の3校で実施しています。



地域安全マップの作成



総合防災訓練

○その他の取組

連携・協働の取組を通して、保護者・地域の学校への理解が進み、教育活動への協力体制が広がりました。また、児童・生徒の学力向上や自己肯定感・自己有用感の向上に結びついています。

- ・ゲストティーチャー・地域人財の活用 → より豊かな体験学習・活動
- ・学園学習ボランティアの管理運営 → 個に応じた指導、多様な授業
- ・漢検、数検、英検の団体受検推進 → 自らチャレンジする心の育成
- ・パワーアップ学習会（補習教室）の推進 → 学力定着への個別対応

■ 今後の展望・課題

保護者や地域の皆さん、教職員が協働して学園の子供たちの教育を進めてきました。小・中の連携が進み、相互乗り入れ授業や学園での交流活動などについての児童・生徒の評価は高く、小・中学校間の段差解消も進んでいます。また、コミュニティ・スクールの運営においても、学園と地域の連携、協働は順調に進み、児童・生徒が地域の皆さんから教育活動への支援を受け、触れ合いをとおして地域の子供として育てています。そして、それぞれの課題解決に取り組み、よりよい学園・地域を目指し、一步一步ですが、着実に前進しています。

子供たちのためによりよい教育を目指し、学校・保護者・地域との「熟議」と「協働」を通して、コミュニティ・スクールを基盤とした小・中一貫教育のさらなる充実・発展に努めていきます。

HP：三鷹中央学園

<http://www.mitaka-schools.jp/mitakachuo/>

連絡先：三鷹市立第四中学校

三鷹市立第三小学校

三鷹市立第七小学校

0422-43-9141

0422-43-2128

0422-44-5378

[首長部局等との熟議・協働・マネジメントによるCSの充実]

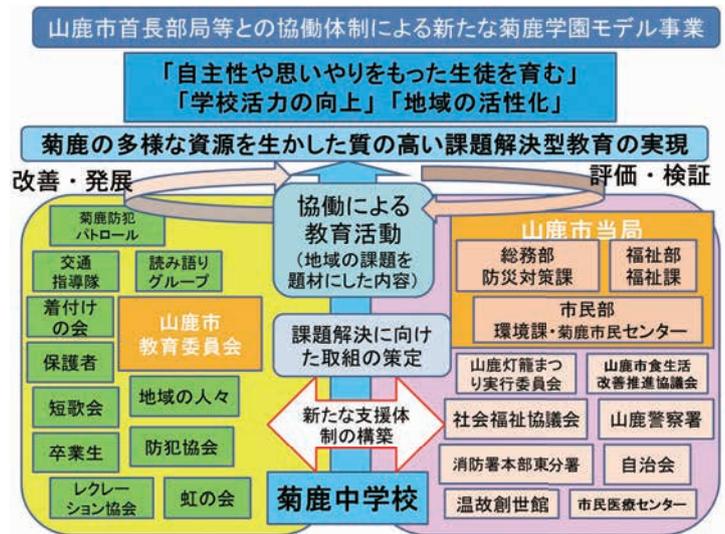
地域総がかりで育む子供たちの自主性と思いやり

熊本県山鹿市 / 山鹿市立菊鹿中学校

■ 学校運営協議会制度導入の目的・概要

○子供は地域の宝

菊鹿中学校区は、以前から、地域・保護者の皆様、各種団体から支えられてきた地区です。本校の実態として、思いやりのある生徒が多く、何事にも誠実に取り組むという良さがありました。しかし、この良さを自分たちで表現するという面では、少し課題がありました。そこで、各種団体の皆様の協力を得て、地域総がかりで「自主性や思いやりをもった生徒を育む」という共通の目標をめざし、コミュニティ・スクールを導入しました。学校運営協議会で協議を重ね、具体的な活動に結びつけています。



■ 活動の特徴・工夫

○研究推進委員会

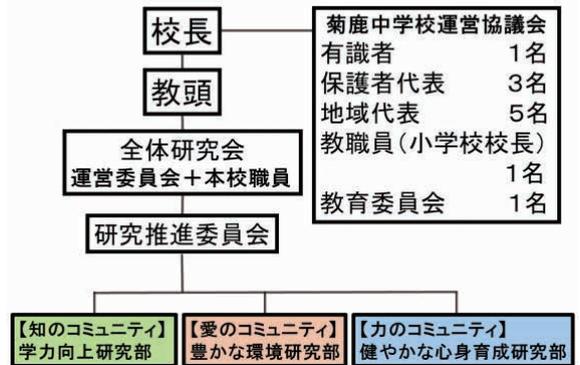
学校運営協議会で協議した学校運営の基本方針や目標を具体的な活動に結びつけていくために、研究推進委員会に3つの部会（学力向上研究部・豊かな環境研究部・健やかな心身育成研究部）を設けています。それぞれの部会で年間計画を立て、コミュニティ・スクールとしての活動に取り組んでいます。

○学校と地域が連携・協働して行う取組

それぞれの研究部が中心となって、教育活動の支援を中心に取り組んでいますが、活動を通して、地域の方々が気軽に学校に足を運ばれるようになりました。また、子供たちが地域の行事や花いっぱい運動等を通して、「地域に貢献する」という場面も増えてきました。

学校と地域が互いに支え合っていく関係が、ますます進んでいます。

菊鹿中学校コミュニティ・スクールの組織



【知のコミュニティ】



短歌作成支援

【愛のコミュニティ】



花いっぱい運動

【力のコミュニティ】



奉仕作業

■ 立ち上げ当時

○菊鹿中を支える地域

菊鹿中学校区は、以前から、地域・保護者の皆様、各種団体から支えられてきた地区で、学校への支援体制が充実していました。例えば「虹の会」は、“地域の子供は、地域で守り育てる”というポリシーのもとに組織されたボランティア団体です。1中3小の学校行事やPTA活動、地域の行事等に支援をいただいています。そして、平成25年10月1日にコミュニティ・スクールの指定を受け、3つの研究部を中心に、学校・家庭・地域の連携・協働の取組を充実させてきました。

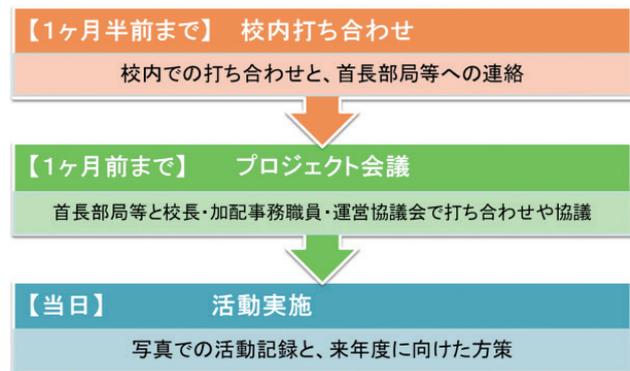


■ 展開・現在

○首長部局等との熟議・協働・マネジメントによる

菊鹿中コミュニティ・スクールの充実・発展
平成27年度からは、首長部局との連携による取組を進めています。首長部局が連携・協働の仕組みに加わることで、コミュニティ・スクールの取組をより一層充実するとともに、継続した取組が可能になります。実施までの準備は、各活動の校内担当者と加配事務職員が核となって進めています。役割分担・相談・連絡調整を行った上で、プロジェクト会議を開催しています（事前の打合せや協議等）。

山鹿市首長部局等との協働体制による取組の流れ



（取組事例） ・ 防災訓練（講話） ・ 認知症サポーター養成講座 ・ きくか夏まつりへの参加 等

首長部局との連携を実施するにあたって、年度当初に市役所の各課への周知・協力依頼を行うとともに、年間計画を作成し、誰（どの団体・部署）が、どのように関わるのかを「見える化」するようにしています。

■ 今後の展望・課題

今後、菊鹿中学校のコミュニティ・スクールを更に充実させるためには、いかに「継続」・「深化」させていくかが鍵であると考えています。

まず、子供たちを、地域や社会に貢献できる大人にするために、「人をつなぐ」という作業が必要になります。また、子供の地域行事参加から地域貢献へどう高めていくか。保小中の更なる連携強化に向けてどのように進めていくか。地域のコミュニティセンター的な役割をどうやって果たしていくか。システムの連携と行事をどのように活性化するか。次の学校運営協議会委員・教職員にいかに関承していくか。併せて、保小中で人材を共有化していくことなど、多くの課題がありますが、これからも実践を重ねながら、理想的な菊鹿学園の形を目指し、引き続き研究を続けていきます。

[学校支援本部・地域青少年育成会議との連携・協働]

地域的課題解決と子供たちの教育環境の充実を目指して

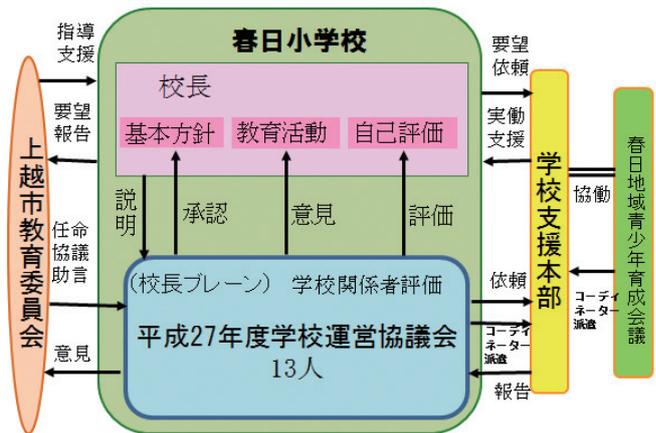
新潟県上越市／上越市立春日小学校

■ 学校運営協議会制度導入の目的・概要

○市内各学校に先駆け、パイロット校として学校運営協議会制度を導入

春日小学校では、学校の中心課題を「社会性の育成」としている。この目標を達成するために、学校と地域が連携・協働する仕組み作りを行ってきました。これまでも学校関係者評価を行っていましたが、評価委員会がイベント的であること、委員に充て職が多く、学校教育との格差が感じられること、学校改善までに十分つなげられていなかったことなどの課題がありました。そこで、学校関係者評価により実効性をもたせるために、委員が一定の権限をもつ学校運営協議会制度を市内の学校に先駆けて取り入れ、基本方針の承認から保護者や地域の方が関わる体制づくりを行いました。

また、学校運営協議会の実働部隊として学校支援本部を設置し、学校関係者との打合せを重ねて運営にあたるとともに、青少年育成会議との連携・協働体制をとることによって、日常の子供の姿を地域全体で把握し、子供たちの教育環境の充実を目指しています。



■ コミュニティ・スクールの特徴・工夫

○「実働性」のある学校支援本部

学校内に地域連携室を2室設置し、隔週火曜日に、地域コーディネーターが常駐しています。

ここでコーディネーターは

- ①学校・子供の現状把握
- ②学校のニーズへの支援
- ③地域の情報提供

を担い、学校と地域をつなぐ役割を果たしています。



コーディネーターと相談する教職員（地域連携室1）

（例）お店探検！

学年の要望

学校支援本部地域
コーディネーター

地域の
商店街



<担任の期待以上の店舗数を確保>

○学校運営協議会と青少年育成会議の両輪で進める子供の育成

春日地域の小中学校と、春日地域青少年育成会議との広域的な協働体制を構築しています。青少年育成会議からコーディネーターが入ることにより、地域的課題解決に向けて学校や地域から具体的に示された方策をスムーズに実行に移せる体制が整っています。

■ 立ち上げ当時

平成23年度にCS準備委員会を設置。7回の準備会を行い、コミュニティ・スクールとしての在り方や運営について協議を行ってきました。

また、校舎の余裕スペースを活用して地域連携室を設置し、決まった日にコーディネーターが常駐。職員からの相談に応じてもらうことにしました。これが、現在の実働組織である春日小学校支援本部の基礎となりました。

学校評価についても準備委員会から、グランドデザインの作成に携わってもらうことで、委員の方のモチベーションがあがりました。

地域啓発のためのリーフレットの作成にもあたりました。



地域啓発リーフレット（平成23年度）

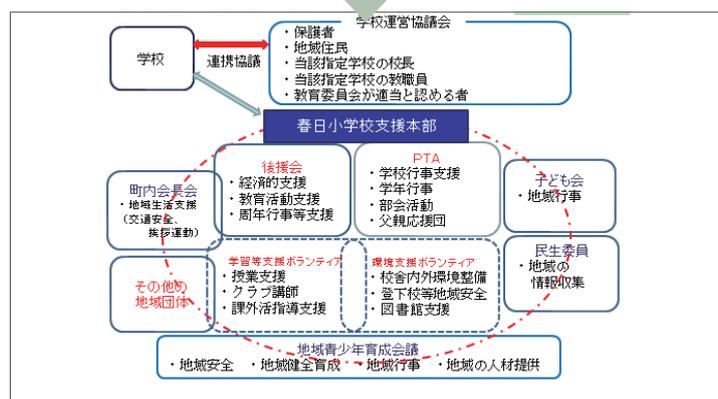
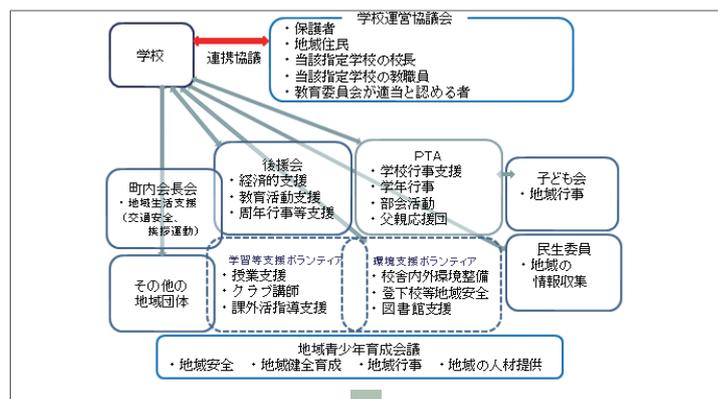
■ 展開・現在

○学校運営協議会と学校支援本部

学校運営協議会と学校支援本部の2つを分離した体制をとることにより、それぞれの役割と権限が明確になり、結果として学校運営協議会の負担軽減につながっています。

○青少年育成協議会との協働

コミュニティ・スクールに指定されたときに、地域青少年育成会議と学校運営協議会との協働体制の強化が打ち出されました。この要請に対応すべく、平成26年に組織の改編が行われた。規約についても「地域の教育体制を考える」とあったのを、「学校運営協議会と連携して地域の教育体制を考えること」に改編されました。ここに春日地域の小中学校と春日地域青少年育成会議との広域的な協働体制が構築され、5名のコーディネーターは春日地域青少年育成協議会から2名、学校運営協議会から3名があたり、学校運営協議会と青少年協議会の両輪で子供を育てようとするモデルになっています。



■ 今後の展望・課題

課題としては、地域の人財確保の継続性があげられます。委員は自らを磨きつつ、後継者を育てることが重要です。また、更なる学校理解と子供理解を進めるために、学校運営協議会制度の地域啓発と、目に見える子供たちの成果をあげる必要があります。

そして、学校支援本部と他組織との連携協働をさらに進め、先生方の要望を的確に把握し、それに応えていくとともに、地域住民への浸透を図っていく必要があります。

[学校運営協議会制度を活用した高等学校における地域との連携・協働の取組]

まちを活性化する高校生の“ミッション”

高知県幡多郡黒潮町／高知県立大方高等学校

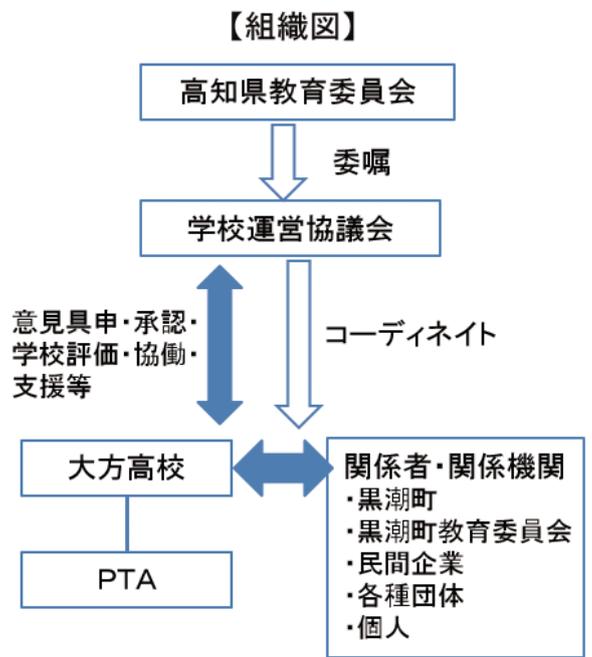
■ 学校運営協議会制度導入の目的・概要

○学校再編をきっかけに地域に目を向ける

高知県黒潮町では、高校の廃校により、地域に最大の「空き屋」が生まれ、地域が疲弊することが懸念されていました。そのため新しい高校として生まれ変わる大方高等学校と連携し、目標を地域活性化の拠点に位置づけ、「地域に支えられた学校に」という考えのもと、地域参画型の学校を目指すこととなりました。

その取組の中で毎年、地域の人たちが大方高等学校の生徒に、まちの課題を解決するための「ミッション」を提示し、生徒はその達成に向けて学習に取り組んでいます。

「自律創造型地域課題解決学習」と名付けられたこの取組では、黒潮町の特産品の開発、観光マップの作成、イベントへの参加・協力など、地域資源を生かしたアイデアが生まれてきました。地域の人たちと高校生の出会いがまちを変え、地域の活性化の拠点となっています。



■ コミュニティ・スクールの特徴・工夫

○運営体制

大方高等学校の「自律創造型課題解決学習」は、黒潮町内の団体との連携・協働が前提となっています。地域企業、地域団体、町役場に対するミッション提示の依頼や調整は、高校の総務部企画研修担当教員（総合学習コーディネーター）が窓口となり行われています。ミッションには、それぞれ担当教職員が配置され、生徒が教職員や地域団体と連携して課題解決に取り組んでいます。黒潮町は必要に応じて活動の支援を行うほか、生徒のアイデア発表会には町長も参加し、活動を応援しています。コミュニティ・スクールである大方高等学校は、このプログラムを含め、学校運営全体に対して、地域住民・保護者等からなる学校運営協議会が意見を述べる体制となっています。また、高知大学総合教育センターは、年間を通じて数回にわたり高校を訪問し、プログラムの進行上の問題点に対してアドバイスをを行い、教育的な効果が発揮されるように支援を行ってきました。

○継続性

校長をはじめ、教職員の異動によって取組が減退してしまうという可能性に対して、大方高等学校では、①「学校の未来を語る会」から続く開校の理念の継承、②コミュニティ・スクールとして地域住民が参画する学校運営協議会による方針の決定、③学内人事として企画研修担当の配置、により継続性を担保しているほか、教職員が教育的効果を実感していることが、継続のための良い刺激となっています。



「高校生のアイデアによる商品開発」

地域との連携・協働による高校生の自律創造型課題解決学習から生まれた最大のヒット作が「カツオたたきバーガー」です。この商品は、高校生と黒潮町雇用促進協議会、「道の駅ビオスおおがた」の食堂「ひなたや」が協力して開発したものです。

開発した翌年には、「銀座で売ろう！」というミッションを掲げ、実際に銀座にある高知県のアンテナショップで販売活動を行いました。



「カツオたたきバーガー」

■ 立ち上げ当時

○学校再編計画と地域再生計画

平成15年11月、前身である県立大方商業高等学校を廃校とし、新しく多部制・単位制の高校を設置することが計画されました。当時の大方町（現黒潮町）は、国の地域再生計画の拠点に大方商業高校を位置づけ、学校の将来についてさまざまな角度から検討が進められました。

○「学校の未来を語る会」が地域へのまなざしを基礎に

「学校の未来を語る会」が平成16年1月に発足し、新しい学校の基本方針等について、8回にわたり審議が行われました。最終的には「地域に支えられた高校に」という考え方を提言としてまとめ、地域参画型の学校を目指すこととなりました。

平成17年4月に大方商業高等学校は、高知県立大方高等学校として再編され、「未来を語る会」は、「コミュニティ・スクール推進委員会」へと発展し、平成18年4月にコミュニティ・スクールとして指定を受けた後は「学校運営協議会」へと改組されました。



■ 展開・現在

○総合的な学習の時間に「自律創造型地域課題解決学習」を導入

大方高等学校では、「総合的な学習の時間」を活用し、アントレプレナーシップのテーマのもと、高知大学との連携で開発したプログラム「自律創造型課題解決学習」に取り組んでいます。

このプログラムは、黒潮町の地域企業やNPO、町役場などから提示される「ミッション」に対し、生徒が現地調査などをおして自分たちなりの解決策をまとめ、最終的にアイデアを発表する活動です。

このプログラムのポイントは、地域住民と学校がミッションを下地に双方向で生徒に関わることにあります。生徒が大きく成長するだけでなく、地域の人も生徒の成長を見て元気づけられたり、生徒のアイデアが地域の課題解決や地域資源の掘り起こしなど産業振興の参考となっており、生徒、地域双方に効果が生じています。

「私たちのまちには美術館はありません。美しい砂浜が美術館です！」

黒潮町ではゴールデンウィーク中、「NPO法人砂浜美術館」が主催するイベント「砂浜Tシャツアート展」が開催されます。全国から公募したオリジナルのデザインをTシャツにプリントし、入野海岸で展示します。

平成元年から続くこのイベントに、大方高等学校の1年生はボランティアとして参加し、地域に出て行く第一歩となっています。



「砂浜美術館」Tシャツアート展



■ 今後の展望・課題

これまで行ってきた取組を継続するとともに、『生徒には夢を 保護者には希望を 地域には信頼を！』という目標に向かって、英知を結集した取組をさらに充実させていきたい。特に『地域が元気になり、大方高等学校が活性化する』という利益の双方向性を高めることが求められ、そのためには、生徒自身が力をつけること、学校の組織力を高めること、各教職員が教育のプロとしての自覚と責任感を持ち、保護者・地域の期待に応えていくことが大切です。

新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について（答申）（中教審186号）

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1365761.htm

→ [中教審答申186](#) で検索！

中央教育審議会において、従来の学校支援地域本部等の活動を基盤に、「地域学校協働本部」を全ての地域に整備し、地域全体で学び合い未来を担う子供たちの成長を支える活動である「地域学校協働活動」を推進していくこと等が提言されています。

「次世代の学校・地域」創生プラン～学校と地域の一体改革による地域創生～

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/28/01/1366426.htm

→ [馳プラン](#) で検索！

中央教育審議会の3答申（上記答申、「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について（答申）」、「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）」の内容を推進するため、具体的な施策と工程表がまとめられています。

文部科学省HP 学校と地域でつくる学びの未来

<http://manabi-mirai.mext.go.jp/> → [学び未来](#) で検索！

学校支援地域本部や放課後子供教室等、地域と学校が連携して子供たちの成長を支えていく取組の概要や事例紹介、全国の実施状況、関係法令等の資料等についての情報を発信しています。

文部科学省HP 学校と地域でつくる学びの未来 表彰事例

<http://manabi-mirai.mext.go.jp/exam/commendation.html>

→ [学び未来](#) [表彰](#) で検索！

『平成27年度の地域による学校支援活動事例集』に掲載されている取組事例をはじめ、平成20年度以降に文部科学大臣から表彰を受けた活動の事例を紹介しています。

文部科学省HP 土曜学習応援団

<http://doyo2.mext.go.jp/> → [土曜学習応援団](#) で検索！

企業、団体、大学の協力を得て、子供たちの土曜日の豊かな教育環境の実現に向けた取組を推進する「土曜学習応援団」に関する情報を発信しています。それぞれの地域で土曜学習を支援している企業、団体、大学や提供されている学習プログラムを検索することが可能です。

文部科学省HP コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/community/

→ [コミュニティ・スクール](#) で検索！

コミュニティ・スクールに関する情報や資料を掲載しています。「コミュニティ・スクールパンフレット」、「学校運営協議会設置の手引き」、「ワークショップのすすめ」のダウンロードができます。また、全国8会場で開催するフォーラムやCSマイスターの派遣制度等の情報も掲載しています。

連絡先

地域学校協働活動 文部科学省生涯学習政策局社会教育課学校地域連携・協働推進プロジェクトチーム
電話番号：03-5253-4111（代表）内線：3284 E-mail:manabi@mext.go.jp

コミュニティ・スクール 文部科学省初等中等教育局参事官付学校地域連携・協働推進プロジェクトチーム
電話番号：03-5253-4111（代表）内線：3720 E-mail:syosanji@mext.go.jp



文部科学省